

(経済論集論文2014年下)

第一次大戦後の中国興業銀行の発展 (1918-1920年) (下)

篠永宣孝

第四節 戦後 BIC の産業投資と資本の固定化

第一次大戦後の BIC の営業活動は、とりわけ戦後フランスの復興資材・商品・食品・資源などの需要拡大やブーム (にわか景気) にも乗って、大規模で矚目に値するものであった。世界の景気の回復にも支えられ、BIC の商工業企業・事業や金融業への資本参加・融資が激増した。BIC が行った多数の企業への投資活動の中で、BIC がとりわけ気前よく優遇・助成・育成した企業や事業は、海運貿易会社 [sociétés maritimes et commerciales]、化学製品会社 [sociétés de produits chimiques]、ゴム会社 [sociétés de caoutchouc]、鉄鋼・造船・建築会社、食品・木材会社、銀行・保険業など⁶⁹——その多くが戦争末期から戦後の新興産業や平和産業への再編過程の企業——であった。それが、次の表 12 (BIC の主要債務者と債務額) に見られるように、結果的に BIC の財政状況を圧迫し続けることになるのである。表 12 の 46 名の主要債務者だけで、BIC は 1919 年末に 1 億 8280 万フラン、1920 年末に 3 億 4160 万フラン、1921 年 6 月に 4 億 3500 万フランもの貸越額 [découverts] ——各時期の BIC 資本金の 2～3 倍——を抱えていたのである。

表 12 中国興業銀行の主要債務者と債務額 (1919～1921年) (単位: 100万フラン)

債務者 (Débiteurs)	1919年	1920年	1921年
Société Maritime et Commerciale du Pacifique (SMCP)	50.6	130	190
Société pour l'Industrie Chimique en France (SPICEF)	19.9	45	45
Brössard, Mopin et C ^e	37.2	(37.2)	(37.2)
Société Maritime et Commerciale de France (SMCF)	«	12	31.2
Louis Turgan, administrateur de la SMF	«	18.4	20
Banque Centrale Française (BCF)	«	10.6	11.8
Société Maritime Française (SMF)	3.8	10.4	11.3
Salomon Van Dyck, importateur	4	10.8	9.9

Albert Brunschweiler, collaborateur d'A. Gallusser	«	8.8	9.4
Société Maritime Belge (SMB)	9.3	5.4	8.5
Albert Gallusser, ad ^f -délégué de la SMCP	7.7	10.4	7
Société Générale des Chantiers de l'Ouest (SGCO)	«	5.1	6.9
Société des Constructions Mécaniques de la Courneuve	«	2.1	5.9
Stéphane Roux-Baudrand	6	3.5	4.5
Maurice Basson	4.9	(4)	4
J.-B. Gault, importateur	4	(4)	3.9
Société des Produits Alimentaires Dusol (SPAD)	1.8	2.3	3.3
David Hyaffil, fondateur de la SMCF	«	2.6	3.1
Charles Goujon, p ^t des Etab ^{ts} de Charles Goujon	1.9	(2)	2
Joachim Sanchez	1.8	(1.6)	1.6
Maison Charles Dewald	0.7	(1.8)	1.6
Société d'Exploitations Agricoles et Forestières (SEAF)	«	0.5	1.4
Société des Produits Chimiques de Paimboeuf (SPCP)	12.7	1	1.3
Société anonyme Meurer Frères	«	0.4	1.2
André Gault	0.1	(1.2)	1.2
Jean Galmot	«	1.5	1.1
Société pour l'exploitation du Soja	0.9	1.1	1.1
Eveil Français	«	0.3	1.1
C ^{ie} Nouvelle de Presse et de Librairie (et "Lanterne")	0.6	1	1
S ^{te} des Recherches Minières et d'Etudes Industrielles	1	1	1
J.L.Weyler, industriel et ad ^f de la C ^{ie} de Navigation F-C	1.8	(1)	1
Sangouard	0.7	(0.6)	1
Henri Danel	«	0.4	0.6
Fleury	0.9	(0.6)	0.6
Compagnie Internationale et Coloniale	0.5	0.1	0.6
Paul Mallon	0.8	«	0.6
Société des anciens Etablissements Sacha	0	0.5	0.5
Gruet et C ^{ie}	0.3	(0.3)	0.3
Paul Carré	0.6	«	0.3
G. Johnson	3.2	(0.2)	«
Bernadeau	4.5	«	«
Banque des Colonies (Bruselles)	«	1.4	0
Camille Aymard, ad ^f -délégué de "La Liberté"	0	0.5	«
Société des Ateliers et Chantiers de Bayonne	0.6	«	«
Olivier et C ^{ie}	«	«	0.6
Compagnie des Produits Chimiques de Savoie	«	«	0.6
Total		182.8	341.6
			435.0

(1919年と1920年の数値はそれぞれ12月31日現在のもので、1921年の数値は6月30日現在のものである。また、括弧内の数値は1921年4月30日現在のものである。)

[Source : Audience du Tribunal Correctionnel de la Seine du 31 mai 1923, op. cit., pp. 9-19 ; Rapport d'André Poisson, inspecteur des Finances, du 22 juillet 1921 et Rapport de la BPPB (Projet détaillé de réorganisation de la BIC) du 27 septembre 1921, MAE(SE, AO), Chine, vol. 98, folio 63-161 et 162-260、などから作成。]

そこで次に、BIC が特別に厚遇した企業（事業）の中でも最も重要であったもの——海運貿易会社 [下記の(1), (2), (3), (4), (5), (6)]、化学製品会社 [(7), (8), (9), (10), (11), (13)]、ゴム会社 [(12)]、食品・木工会社 [(14)]、鉄鋼・造船・機械会社 [(15)]、銀行・保険業 [(17), (18), (19)]、出版会社 [(20)] 等々——を取り上げ、その事業内容・経営状況・経営陣などについて、史料の許す限り詳細に分析・検討してみよう。BIC が何故それ [経営を危うくする] ほどまでにこれら企業（事業）への融資にこだわり深入りしていったのか、その理由の一端が窺えるからである。

(1) 太平洋海運商業会社 (Société Maritime et Commerciale du Pacifique, SMCP)

SMCP は、極東で営業していた古くからの運輸航海会社や貿易商會が合同されて、1918年7月17日に資本金150万フランで設立された。SMCP 本社はBICと同じ建物——パリ、サン・ラザール通り、74——に置かれた。創業者は企業家 [industriel] のアドルフ・シャイエ [Adolphe Chailley] で、設立当初はA. ガリュセールは経営陣にはいなかった。SMCP の事業は急激に発展して、間もなくA. ガリュセールは代表取締役、次いで総支配人 [directeur général] に任命された。SMCP 資本金は、1919年8月20日に600万フランへ、同年11月13日に1200万フランへ、そして最後に1920年6月11日には2500万フランへと矢継ぎ早に増額された。それに加えて、1919年6月13日には、1200万フランの社債 [obligations] ——金利6%、1922年から10年間で償還されうる——が発行された。

SMCP は様々な業務——造船、海運（艀装）、傭船、購入と販売、開発と経営、あらゆる委託販売取引、あらゆる商品取引など——の遂行を目的としていた⁶⁰。だが、同社は「原産地で購入してヨーロッパで販売するというよりも、とりわけ中国やインドやアフリカの油脂種子 [graines oléagineuses] の輸送に特化していた」⁶⁰ようである。同社は、中国やインドシナやインドなどに多数の支店——マルセイユ、天津、漢口、サイゴン、ボンディシェリー、チュニス、ダカール——を保有し、「極東—フランス間やアフリカ西海岸—ヨーロッパ間の輸入定期便サービスを確立すること」⁶⁰に専心していた。同社のニューヨークでの代理店は、海上貿易会社 [Marine Trading Corporation] であり、ヨーロッパでは同社はロンドンとマルセイユを結ぶ定期便を開設していたウィン・ライン [Win Line] の代理店を務めていたのである。1921年のSMCP 取締役会は、社長のシャルル・カーン [Charles

Kahn)、事業の推進者である代表取締役のアルベール・ガリュセール〔Albert Gallusser〕⁶²、取締役のジャン・ルージュリー〔Jean Rougerie〕（弁護士）、ジュール・グラヴィエ〔Jules Gravier〕、ポール・ブリュイセン〔Paul Bluysen〕⁶³、アンリ・ゲブレ〔Henri Gaebelé〕⁶⁴、ピエール・ロケルブ〔Pierre Roquerbe〕などで構成されていた。

BIC 総支配人 J. ペルノットがインドシナ銀行天津支店長（1910-12 年）であった頃から SMCP の中心人物（代表取締役・総支配人）となる A. ガリュセールと関係が深かったことから、BIC は SMCP 設立当初から大々的に支援した。BIC は、1919 年末に同社の総株数 4 万 8000 株のうち 4,000 株（84%）、1920 年末に同社の総株数 10 万株——額面 250 フランの株式で全額払込み済み——のうち 6,617 株（6.6%）を保有していた。BIC のこの資本参加は、SMCP に対し際限なく行われた莫大な貸付金〔avances〕や当座貸越〔découverts〕と比べるならば、むしろ控え目であったと言えよう。すなわち、BIC による SMCP への当座貸越・貸付金は、1920 年恐慌・海運不況の到来によって、まるで BIC の合資会社〔commandite〕であるかのごとく、1919 年末の 5060 万フランから、1920 年末の 1 億 3000 万フラン、1921 年 6 月の 1 億 9000 万フランと雪だるま式に膨張していったのである⁶⁵。これに、A. ガリュセールの債務額——1919 年末に 770 万フラン、1920 年末に 1040 万フラン、1921 年 6 月に 700 万フラン——も付け加えねばならないであろう（表 12 参照）。当然のことながら、BIC は、1919 年 9 月以来、SMCP のこうした異常な財務状態〔situation irrégulière〕に憂慮していた。1919 年 9 月 17 日に BIC は SMCP に次のように書き送った。「当社〔BIC〕の経営委員会〔comité de direction〕は、現在 3313 万 4494.8 フランに達する貴社の普通口座の当座貸越をもはやこれ以上増加させることを認めない」⁶⁶と。また、1920 年 3 月 6 日には、「わが社における 1920 年 3 月 5 日の貴社の口座状態——貸越額〔soldes débiteurs〕は普通口座の 3638 万 4754.52 フラン——について再度注意を喚起したい。隠さずに申し上げますが、貴社から支払われた僅かの資金は概ね直ぐ新たな取引に充当されるので、貴社のこうした異常な財政状態によって我社は大窮地に陥っております」⁶⁷と。大蔵省会計検査官 A. ポワソンによると、「BIC によって SMCP になされた貸付金〔avances〕は、パリやマルセイユ、インド、インドシナ、中国、セネガルなどでの工業設備（製油・水田）や建物、4 万トン近い商船団、莫大な商品ストックなどの無分別で性急な購入に使用された」⁶⁸と。

このような SMCP の不安定で憂慮すべき状況を危惧して、BIC 頭取 A. ベルトロが BIC 本店支配人 [Directeur Siège Social] フランツ・コーリ [Frenz Kohly] と BIC 取締役 R. キャラリ・ド・ラマズィエール [R. Calary de Lamazière] を SMCP 取締役会に派遣したのは、それぞれ 1920 年 7 月、同年 11 月になってからであった。さらに、同じ頃、ルーベ [Roubaix] の尊敬すべき元代議士ウジェーヌ・モット [Eugène Motte]、彼の女婿スネイヴ [Senayve]、マルセイユの海運業者ドメルグ [Domérgue] からも新たに SMCP 取締役会に加わった。キャラリ・ド・ラマズィエールは、直ちに SMCP 取締役会で主導的役割を果たし、支配人 [directeur] としてジャソン [Jasson]⁶⁸ を任命する一方、同年 11 月に自らが主宰し、A. ガリュセール、J. ルージュリー、F. ゴーリ、ジャソンからなる経営委員会 [Comité de Direction] を立ち上げた。だが、BIC 主導のこうした SMCP 再建策はもはや遅きに失したようである。キャラリ経営委員会の形成後三ヶ月が経過して、キャラリを始めとする経営委員会メンバーの大部分は、BIC 自身が 1921 年 1 月に支払い不能 [défaillance] 状態に陥ることによって、SMCP を去らねばならなかったからである——彼らは、シャピユイ [Chapui]、ヴォルフ [Wolff]、ソヴァージュ [Sauvage] (支配人) の三名の新取締役によって取って代わられた——⁶⁹。このように、SMCP の再建も、1921 年初頭には風前の灯火となっていたのである。

(2) フランス海運商業会社 (Société Maritime Française, SMF)⁷⁰

SMF は 1917 年 6 月 2 日に資本金 200 万フラン——額面 250 フランの株式 8,000 株——で設立された。その 2 週間後には、資本金は 500 万フランに増額された。次いで、1919 年 10 月 10 に 1000 万フラン、1920 年 6 月 15 日には 2000 万フランに増額された。

創業当初の取締役会は、ルイ・チュルガン [Louis Turgan] (モロッコのマザガン [Mazagan] の貿易商、SMF の中心人物)、ジャン・デルムドー [Jean Delmedou] (海軍省機関士)、アンドレ・シャンパン [André Champin] (諸会社の取締役) で構成されていた。1919 年 6 月 30 日の株主総会で、A. シャンパンに代わって、シェロン [Chéron] (予備役大佐) とルグーニュ [Legougne] (アリアンス・ SHIPPING・ボード [Alliance Shipping Board] 社長) が取締役に任命された。

SMF は、戦後ブームの好況を反映して、1918 年に 25 フラン (10%)、1919 年には 50

フラン (20%) もの配当金を分配したが、1920 年は一転して 700 万フランの損失を被った。BIC は同社に莫大な貸付〔avances〕を行っており——1919 年末に 380 万フラン、1920 年末に 1040 万フラン、1921 年 6 月に 1130 万フラン (表 12 参照) ——、その結果、1920 年 3 月以降、BIC はこうした SMF への信用貸し〔découvert〕に大いに悩まされたのである。この SMF の貸付に、SMF 創業者 L. チュルガンへの貸付——1920 年末の 1840 万フラン、1921 年 6 月の 20 万フラン——も考慮する必要がある。SMF は、それら貸付の担保として、1920 年 9 月にマルシェルブ・ブルヴァール不動産会社〔Société Immobilière du boulevard Maiesherbes〕の全株式を、1920 年 10 月にフランス国内航海会社〔Compagnie Française de Navigation Intérieure〕の 7,000 株と木材・石炭・石油会社〔Société de Bois, Houille et Pétrole〕の 3,800 株を、BIC に引き渡した。そのうえ、SMF は所有の船舶四隻——保険証券〔police d'assurance〕で 2350 万フランと評価された——を四分の一の価格で売却せねばならなかった。これ以外にも、SMF は、ベルギー海運会社〔SMB〕、海上銀行〔Banque Maritime〕、モロッコ海運会社〔Société Maritime Marocaine〕、ニューヨーク船舶同盟〔Alliance Shipping de New-York〕、アメリカ開発〔Américan Exploitation〕——最後の二社については、SMF は株のマジョリティーを握っていた——などのような子会社の株を保有していたが、それら企業も多かれ少なかれ苦境に立たされていたのである。

1921 年 1 月以来、SMF の財政状態は一段と悪化して、同社保有の船舶の一つジェネラルリヨテ〔Général Lyautey〕号が司法当局によって売却されてしまったのである。

(3) ベルギー海運会社 (Société Maritime Belge, SMB) (SMF の子会社)

SMB は、フランス海運商業会社〔SMF〕やその創業者 L. チュルガンを含む様々な名士たち〔personalités〕によって、1919 年 2 月に資本金 50 万フランで設立された。BIC は、この小海運会社に 1919 年末に 930 万フランという SMB 資本金の実に 19 倍もの貸付を行っていた。だが、その融資額は、1920 年 3 月に 650 万フラン、1920 年に 540 万フランと一時的には減少したが、1921 年 6 月には 850 万フラン、同年 8 月には 920 万フランと再び増加したのである (表 12 参照)。この SMB への貸付に、当然 SMF の創業者 L. チュルガンへの貸付——1920 年末の 1840 万フラン、1921 年 6 月の 20 万フラン——も考慮する必

要があろう。1920年10月2日に、SMFは、所有していたSMB株1,760株(44万フラン)を担保としてBICに譲渡した⁷⁹⁾。SMBの方では、三隻の大型船〔vaisseaux〕の艤装を解かねばならなかったのである。

(4) フランス海運商業会社 (Société Maritime et Commerciale de France, SMCF)

SMCFは、レヴァノン人のダヴィッド・ヤフィル〔David Hyaffil〕によって、同氏所有の二隻の船を運営する目的で、1918年6月13日に資本金1000万フランで設立された。1920年2月27日の株主総会の決議により、同社の資本金は一挙に3000万フラン(全額払込み額面500万フランの株式60万株)に増額された——BICは同社株5,500株(0.9%)を保有している——。この増資は、BICの後援のもとに実現された。創業当初の取締役会は、D. ヤフィル(船主)、マキシム・コルブレ〔Maxime Corblet〕(ルーヴルの船主)、ジョルジュ・ルージェ・ラガヌ〔Georges Rougier Lagane〕、ギュスタヴ・ディックオフ〔Gustave Dickhoff〕で構成されていたが、最後の二人は1920年8月に、クレマン・ベイヤール〔Clément Bayard〕(ラヴァロワ〔Lavallois〕の企業家、銀行組合会社〔Société Syndicale de Banque〕取締役)、ローゼンバウム〔Rosembaum〕(セヌ商事裁判所所長)、レヴィ〔Loevi ou Loewy〕(パリ＝ベルシー〔Paris-Bercy〕の貿易商)、プレヴォ〔Prévost〕(クロード・ラフォンテーヌ＝プレヴォ銀行〔Banque Claude Lafontaine, Prévost & Cie〕支配人)らによって取って代わられた。

同社の目的は、海運、傭船、貿易、航海など様々な事業、すなわち「飛行機用ラジエーターの製造、インドシナ産米やブラジル産砂糖の購入、戦禍で荒廃した地方〔résions dévastrés〕への硝石〔nitrates〕の供給、ルーマニアへのラード〔saindoux〕の供給、ヴェルノン製鋼所〔aciéries de Vernon〕への資本参加、マルセイユの製糸工場の購入」⁷⁹⁾、グアノ〔Guano〕の輸送などであった。

SMCFは、1918-1919年に購入した総トン数7,400トンの船舶三隻と5,000トンの船舶(80%所有)を保有していた。これらの船舶は、貸借対照表ではトン当たり1,300フランと評価されている。1918-1919年に、同社はインドシナ産米とインド産やジャワ産砂糖を購入して、それらをヨーロッパで販売した。1920年には、同社は2万トンの硝石を購入し、フランス北部の諸県に輸送した⁷⁹⁾。

SMCF 設立から 1919 年 12 月 31 日までの 18 カ間の営業成績は極めて好調で、貸借対照表(bilan)合計は 5136 万フラン、総収益[bénéfices bruts]は 1019 万フラン、純益[bénéfices nets]は 919 万フラン、積立金は[réserves] 562 万フラン、引当金[amortissements]は 155 万フランにも達した。それゆえ、配当金総額[bénéfices distribués]も 202 万フラン、1 株当たりの配当金[dividende par action]は 93.55 フラン(19%)、1 株当たりの発起人持分[part de fondateur]の配当金は 243 フラン(48.6%)にも達した。ところが、1920 年度の収支決算は、1920 年恐慌(とりわけ海運不況)の煽りをもろに受けて、危機的状況となった。表 13 の SMCF 貸借対照表(1920 年 12 月 31 日)が示すように、貸借対照表合計は 1 億 41 万フランに拡大したものの、商船団[flotte]、資本出資[participations]、購入商品などの価値を大きく損失するなどして、結局 537 万フラン(SMCF の算出)——修正された実質的損失は、3000 万フランの資本金をも上回る実に 4330 万フラン——もの欠損[pertes]を計上したのである⁶³。

表 13 SMCF の貸借対照表(1920 年 12 月 31 日)(単位:1,000 フラン)

Actif (借方)	SMCF の数値	修正された数値
Usines de la Capelette. Terrains de Toulon, Casablanca, Mobilier	730	730
Frais de constitution et d'émission	742	—
Flotte (6200 T.)	66,764 (1)	34,100
Participations	3,697	1,400
Cautions en titres	3,962	3,962
Frais généraux	22	22
Caisse et effets à recevoir	642	642
Laiton : 100 t. à livrer	937	937
2700 T. riz vendues	4,373	4,373
7400 T. riz à vendre à 150 ^f les 100 kilogs	11,100	8,880
Portefeuille titres	5,796	5,796
Pertes	5,373	43,295
	104,138	104,138
Passif (貸方)		
Capital	30,000	—
Provision fiscale	309	—
Réserves diverses	27,507	—
Créditeurs	44,775 (2)	—

Amortissements	1,547	-
	104,138	104,138

(1) 船級協会登録のため検査中の費用 450 万フランは含まれない。

(2) この中の BIC への債務は 1750 万フラン。

[Source : [Note sur la] Société Maritime & Commerciale de France du 1^{er} Février 1921, AHCA (CL-Agricole), FBI, 439AH941.]

SMCF のこうした危機的状況を反映して、1920 年 2 月におよそ 1,000 フラン（額面 500 フランの株式）で上場された SMCF の株式相場は、1920 年下半期に次のように下落の一途をたどった（表 14 参照）。すなわち、SMCF の株式は 1920 年 9 月頃までは 1,000 フラン以上の高値を維持していたが、同年 10 月頃から相場が急激に下落し始め、1921 年 2 月 1 日にはとうとう 215 フランにまで暴落してしまったのである。

表 14 フランス海運商業会社〔SMCF〕の株式相場〔単位：フラン〕

	最高値(フラン)	最低値(フラン)
1920 年 7 月	1525	1265
8 月	1450	1330
9 月	1375	865
10 月	915	665
11 月	840	400
12 月	499	275
1921 年 2 月 1 日	215	

[Source : [Note sur la] Société Maritime & Commerciale de France du 1^{er} Février 1921, AHCA (CL-Agricole), FBI, 439AH941.]

一方、BIC の SMCF への信用貸しは、1920 年末の 1200 万フランから、1921 年 6 月の 3120 万フランに激増したうえ、事業の中心人物 D. ヤフィル〔David Hyaffil〕個人への信用貸しも、1920 年末の 260 万フランから、1921 年 6 月の 310 万フランへと増加していたのである（表 12 参照）。

こうした状況から、SMCF は、1921 年 3 月 14 日にセーヌ商事裁判所に会社更生の手続き〔réglement transactionnel〕の申請を行った⁷⁰⁾。同年 4 月 5 日にこの申請は承認されたが、同社はその後更生整理〔liquidation judiciaire〕——つまり会社の清算——を求めるとに至り、それが 1923 年 11 月 5 日に承認されたのである⁷¹⁾。

(5) 仏中航海会社 (Compagnie de Navigation Franco-Chinoise)

同社は、傭船、船舶の売買を目的に、1919年に資本金200万フランで設立された。本社はBICのオフィスに定められ、とりわけ太平洋海運商業会社(SMCP)と利害を共有していた。というのは、同社取締役会は、A. ガリュセール(SMCP代表取締役)、R. キャラリ・ド・ラマズイエール(BIC・SMCP取締役)、シャルル・カーン(SMCP社長)、ジャン・ルージュリー(SMCP取締役)、ジュリアン・ヴェイラー [Julien Weyler] (パリの工業家)、ウジェーヌ・オグレル [Eugène Hogrel] (海軍予備役将校) で構成されていたからである。BICの信用供与 [engagement] は深刻ではなかったものの、同社に1400万~1600万フランもの融資を行っていた⁷⁹⁾。

(6) ムレ兄弟株式会社 (Société anonyme Meurer Frères)

同社は、輸出入貿易、艦装・傭船、生産・取引一般を目的に、1920年1月30日に資本金100万フランで設立された。1920年8月3日の株主総会で、200万フランへの資本金の増額が決定された。同社取締役会は、シャルル・ムレ [Charles Meurer]、ロレンツォ・チポー [Lorenzo Thibault] (パリの貿易商)、エドワード・H・ハルトマン [Edward H. Hartmann]、ロイヤル・ヴィクトール [Royall Victor] (ニューヨーク) で構成されていた。BICは同社に1920年末に40万フラン、1921年4月に160万フラン、同年6月に120万フランの貸付け [avances] を行っていた⁸⁰⁾。

(7) フランス化学工業会社 (Société pour l'Industrie Chimique en France, SPICEF)

SPICEFは、化学製品(爆発物・毒ガスなど)を製造する軍需産業として、ポール・ショタール [Paul Chautard] (BIC取締役) やジャック・ド・ギュンズブール [Jacques de Günzbourg] らによって、1915年に資本金300万フラン(額面500フランの株式総数6,000株)で設立された。同じく、パンプフ化学製品会社 [Société des Produits Chimiques de Paimboeuf, SPCP] も、化学製品(軍需品)の製造のために、P. ショタールによって、1916年5月31日に資本金300万フラン(額面500フランの株式総数6,000株)で創設された⁸¹⁾。両社 [SPICEF, SPCP] とも大戦中は軍需工場としてフランスの戦争遂行に協力してきたが、休戦条約締結以後これまでの製造を全て中止して、工場の再転換

〔reconversion〕（平和産業への転換）と合理化に取り組みざるを得なかった。

BIC 総支配人 J. ペルノットは、フランスへの帰還以来、SPICEF の不安定な財務状態を解消し、信用貸し〔découvert〕を清算するのに腐心した——SPICEF は典型的な軍需産業でありながら、戦時中の 1917 年度に 230 万フラン、1918 年度に 77 万フランと多大な損失を計上し、黒字決算が得られていなかった——。1919 年は、SPICEF にとって、正に再編成の時期にあたっていたのである。1919 年の SPICEF への主要債権者と債権額は次のようであった⁷⁹⁾。

中国興業銀行〔BIC〕	9,736,872 フラン
ソシエテ・ジェネラル〔SG〕	7,885,478 フラン
地方銀行中央会社〔Société Centrale des Banques de Province〕	3,177,197 フラン
合計	20,799,547 フラン

〔Source : Audience du Tribunal Correctionnel de la Seine sur l'Affaire de la BIC du 31 mai 1923, op. cit., p. 12.〕

ペルノットはこれら主要債権者との交渉を開始し、「その結果は、問題になっている軍需工場を平時のための工場〔平和産業〕に転換するために、SPICEF と SPCP を従来とは違った形に結集する必要があるというものであった」⁷⁹⁾。1919 年 7 月に、「ソシエテ・ジェネラル〔SG〕と地方銀行中央会社〔SCBP〕は、新たな資本投下を行うことよりも、BIC の自由裁量に任せることにし、両者〔SG, SCBP〕の貸付金の半額を直ちに受け取る——つまり、BIC に 1049 万 1010 フランの債権を 552 万 8906 フランで売却する——ことを選んだ」⁷⁹⁾。その後、SPICEF は BIC の援助を得て同社の資産〔actif〕の現金化〔réalisation〕に取り掛かった。同じ 1919 年 7 月、SPICEF は、所謂「65 トン」過磷酸石灰工場〔Usine de Superphosphates〕を燐酸肥料化学製品フランス連合〔Union Française de Fabriques d'Engrais, de Produits Chimiques et de Phosphates, UFFEPCP〕に売却し、その代価として同連合から発起人株〔actions d'apport〕3 万株（300 万フラン）を取得した。1920 年 2 月に、SPICEF は、ラロシェル市のラパリス〔la Pallice〕所在の別の工場、所謂ロシア・フェノール・ベンジン工場〔Usines de Phénol Russe et de Benzine〕をアルザス化学製品会社〔Société Alsacienne de Produits Chimiques, SAPC〕に売却した。その代価として、SPICEF は、特に SAPC から発起人株 1 万 3000 株を受け取ったが、そのうち 7,000 株を第三者に転売した。こうして、もはや一つの工場も保有しない SPICEF は、新設された様々

な化学会社の株を所有する化学事業総合持株会社〔Omnium d'affaires chimiques〕となった。かくして、1920年6月30日における SPICEF のポートフォリオ〔Portefeuille〕は次のようであった（表 15）。

表 15 フランス化学工業会社〔SPICEF〕のポートフォリオ（1920年6月30日）

アルザス化学製品会社〔SAPC〕		
発起人株	6,000	} 総株数 30 万株の うちの 125,550 株 (42%)
第一回目発行全額払込株	75,000	
第二回目発行 1/4 払込株	44,550	
磷酸肥料化学製品フランス連合〔UFFEPCP〕		
全額払込優先株	4,200	} 総株数 30 万株の うちの 64,200 株 (21.4%)
普通発起人株（パンプフから 1 株当たり、200 フランで買戻した 3 万株を含む）	60,000	
ナント電解金属会社〔SNECM〕		
全額払込普通株	68,575	} 総株数 7 万 5000 株のうちの 68,575 株 (91.4%)
ラヴァレット製作会社〔Ateliers de Const. de Lavalette〕		
500 フラン（1/4 払込）の優先株	1,000	} 1,000 株

（これ以外に、若干の“Distilleries d'Alsace”、“Savonneries des Deux Mers”、“Lorraine d'Etudes et Recherches Minières”の株）

〔Source : Projet détaillé de réorganisation de la BIC du 27 septembre 1921, rédigé par la BPPB, MAE(SE, AO), Chine, vol. 98, folio 162-260, notamment 241-244〕

SPICEF の資本金は、1920年4月に初期の 300 万フランから 650 万フラン（額面 500 フランの株式 1 万 3000 株）に増額された。SPICEF 取締役会は、社長の P. ショートル、マザ將軍〔Général Mazat〕、アンリ・ローラン〔Henri Laurain〕（パリ・ガス会社技術顧問）などの取締役で構成されていた。BIC に対する SPICEF の債務は、SPICEF の資本金を遙かに超えて、1919 年末に 2000 万フラン、1920 年 6 月に 3200 万フラン、1920 年末に 4500 万フラン、1921 年 8 月に 4640 万フランであった（表 12 参照）——SPICEF は BIC にアルザス化学製品会社〔SAPC〕の 9 万 1000 株などを担保に提供していた——。他方、BIC は SPICEF 株を 1919 年末に 2,225 株（全体の 37%）、1921 年に 3,225 株（25%）を保有しており、SPICEF とそのグループの戦後の再編の問題は、BIC 最大の懸案事項の一つであっ

た⁶⁹。

(8) パンプフ化学製品会社 (Société des Produits Chimiques de Paimboeuf, SPCP)

1916年5月に資本金300万フランで設立されたSPCPは、1918年3月に資本金を400万フランに増額した⁶⁹。SPICEFと同様に、P. ショタール、ジャン・ラロッシュ [Jean Laroche]、エルネスト・ドスュルモン [Ernest Desurmont]らによって設立されたSPCPも、休戦後、稼働する間もなかった同社工場の再編を余儀なくされた。SPCPは、パンプフ [Paimboeuf] (サンナゼール近郊) に所有していた二つの工場 (貯蔵品・原料も含む) を転売することにした。一つは所謂フランス・フェノール工場 [Usine dite du Phénol Français] で、アルザス化学製品会社 [SAPC] に、もう一つは所謂100トン過磷酸石灰工場 [Usine de Superphosphates, dites de 100 tonnes] で、磷酸肥料化学製品フランス連合 [UFFEPCP] に、それぞれ譲渡した。SPCPはUFFEPCPから受け取った100フランの発行人株3万株を200フランでSPICEFに転売したけれども、この取引 [opération] でSPCPは50万フランもの損失を出した。この損失を含めて、SPCPの1918-1919年度の決算は2,778,178フランの欠損となった。こうして、SPCPは資本金(400万フラン)の四分之三を喪失してしまったので、1920年4月15日の株主総会で、資本金を400万フランからおよそ八分の一の50万8000フラン(額面160フランの株式3,175株)にまで減額をせざるを得なかった⁶⁹。

1921年にSPCPには、もはや塩素工場 [usine de chlore] ——ナント電解金属会社 [SNECM] に転売することになっている——とアルザス化学製品会社 [SAPC] の発行人株4,000株しか残されていなかった。BICに対するSPCPの債務は、1919年末に1270万フランにまで増加していたが、1921年6月に130万フランに減少した。1921年のSPCP取締役会は、社長のP. ショタール (BIC取締役、SPICEF社長)、ジャン・ラロッシュ、H. ローラン [H. Laurain]、フランソワ＝マリ・ルーラン [François-Marie Rouland] (パリ・ガス会社代表取締役 [administrateur-délégué de la Société du Gaz de Paris]) らの取締役で構成されていた⁶⁹。

(9) 燐酸肥料化学製品フランス連合〔Union Française de Fabriques d'Engrais, de Produits Chimiques et de Phosphates, UFFEPCP〕

UFFEPCP は、「すべての化学製品や肥料の製造販売、全ての鉱山・採石場の開発」⁸³を目的として、1919年8月に資本金1250万フラン（額面100フランの株式12万5000株）で設立された——株式は優先株〔action de préférence〕3万株と普通発起人株9万5000株からなっていた——。9万5000の普通発起人株は次のように配分された⁸⁴。

35,000株 (350万フラン)	所謂「100トン過燐酸石灰工場」の出資〔apport〕としてフルー〔Fleury〕氏に配分。同工場は、330万フランでの売却を約束に、パンブフ化学製品会社〔SPCP〕へ賃貸されていた。
30,000株 (300万フラン)	同工場の賃貸契約権の代償として、SPCPに配分。
30,000株 (300万フラン)	所謂「65トン過燐酸石灰工場」の出資として、SPICEFに配分。

〔Source : Projet détaillé de réorganisation de la BIC du 27 septembre 1921, rédigé par la BPPB, MAE(SE, AO), Chine, vol. 98, folio 250-242〕

UFFEPCPの設立発起人は、フランス化学工業会社〔SPICEF〕とラパリス所在の「硝酸〔acide nitrique〕・硫酸〔acide sulfurique〕製造」工場を新会社にもたらしたパンブフ化学製品会社〔SPCP〕であった⁸⁵。さらに、UFFEPCPは別の二つの工場——モンタルジ〔Montargis〕の、年間20,000～25,000トンの過燐酸石灰〔superphosphates〕の生産が可能なロルシー工場〔usine de Lorcy〕(Etablissements Loyer)とローヌ県のポール・サン・ルイ〔Port Saint-Louis〕の工場——を取得すると同時に、バイヨンヌ〔Bayonne〕にも地所を購入した⁸⁶。

1919年12月に、UFFEPCPは額面100フランの普通株17万5000株を発行することによって、資本金を3000万フランに増額した⁸⁶。

総合持株会社〔omnium〕のアルジェリア・チュニジア鉱山一般会社〔Société générale des mines d'Algérie et de Tunisie〕——1899年に資本金7500万フランで設立——とコンスタンチヌ燐鉱石会社〔Compagnie des Phosphates de Constantine〕——1912年に資本金1000万フランで設立——の技術指導と援助のおかげで、UFFEPCPは、1920年によろやく事業の組織化の時期から脱し、1921年度には年間10万トンの過燐酸石灰の生産可能な三工場が軌道に乗ることになろう。しかしながら、「サン・ゴバン社〔Saint-Gobain〕

やキュールマン社 [Kulmann] など、多くの強力な過磷酸石灰会社による厳しい市場競争」は、新会社 [UFFEPCP] の将来に大きな不安の種を提供していたのである⁶⁷⁾。

実際、UFFEPCP の株式は、1920年に200フラン以上の価格で上場されていたが、それ以後は、1921年3月の75フラン、同年7月の52フランと急落した。

1921年のUFFEPCP取締役会は、鉱業界の大物アンリ・ド・ペイランオフ [Henri de Peyerimhoff] (石炭協会事務長、アルジェリア・チュニジア鉱山一般会社、コンスタンチヌ燐鉱石会社取締役)、ド・マニケ・ヴォブレ [De Maniquet Vauberet] (アルジェリア・チュニジア鉱山一般会社) や A. ベルトロ、P. ショタール、J. ペルノット——三者はそれぞれ BIC 頭取、取締役、総支配人——、アンリケ [Henriquez]、アルチュール・ド・モンチュール伯 [comte Arthur de Montureux]、ドロングル [Deloncle]、ゴルデ [Goldet]、ジュヌヴリエ [Jenouvrier]、M. カフレ [M. Kapferer] などで構成されていた⁶⁸⁾。

1919年末に BIC は UFFEPCP の株式を全体の3.3%に当たる1万株 (1/4 払込) を保有していた。そして、1921年3月には、BIC は UFFEPCP の発起人株6万株を1000万フランの手形 [effets] の担保としてフランス銀行に譲渡している⁶⁹⁾。

(10) アルザス化学製品会社 (Société Alsacienne de Produits Chimiques, SAPC) ⁶⁸⁾

SAPC は、化学製品全般の製造・商取引・売買を目的に、1920年2月10日に資本金1600万フラン (額面100フランの株式16万株) でパリに設立された。16万株のうち発起人株の3万株は、次のような出資者 [apporteurs] に配分された。

13,000 株 (130万フラン)	タン・ミュルーズ化学製品会社 [Société des Fabriques de Produit Chimiques de Thann et Mulhouse] ⁶⁸⁾ に配分。営業財産 [fonds de commerce] と製造方法 [procédés de fabrication] 付きのミュルーズ工場 [usine de Mulhouse] の売却契約に報いるため。
13,000 株 (130万フラン)	フランス化学工業会社 [SPICEF] に配分。ラパリス所在の所謂「ロシア・フェノール・ベンジン工場」二工場と P. ショタール所有の SPCP に賃貸された所謂「フランス・フェノール工場」の売却契約の代償として。
4,000 株 (40万フラン)	パンブフ化学製品会社 [SPCP] に配分。合成樟脳特許の売却契約の代償として。

[Source : Projet détaillé de réorganisation de la BIC du 27 septembre 1921, rédigé par la BPPB, MAE(SE, AO), Chine, vol. 98, folio 245-249]

これらの売却契約（オプション [options]）が実行された結果、次のような支払がなされた。

3,000,000 フラン	染料・タンニン・薬品に特化したミュルーズ工場 [usine de Mulhouse] の購入のため。
200,000 フラン	タン・ミュルーズ化学製品会社 [Société des Fabriques de Produits Chimiques de Thann et de Mulhouse] からくる樟脳売却価格の2%を特許料として。
7,500,000 フラン	ラパリス所在の複数の工場の購入のため

[Source : Projet détaillé de réorganisation de la BIC du 27 septembre 1921, rédigé par la BPPB, MAE(SE, AO), Chine, vol. 98, folio 245-249]

これらのフェノール工場は軍需工場 [usines de guerre] であったので、休戦直後から生産の停止を余儀なくされていたのである。

1920年4月にアルザス化学製品会社 [SAPC] の株式が450%ものプレミア付きで上場され、525フランにまで上昇していたが、1921年に突然額面価格の100フラン近くまで急落した（1921年9月で106フラン）。その間（1920年7月27日）に、SAPCは資本金の1600万フランから3000万フランへの増額を行った——額面100フランの株式（1/4払込）を150フランの発行価格で14万株を発行——。1株当たり50フランのプレミアにより、SAPCは総額700万フランを積立金 [réserve] に回すことができた。だが、同社設立以来、配当金は全く支払われていない。SAPC取締役会は、社長のA. ベルトロ、J. ベルノット、P. ショタール、レイモン・ボーゲイ [Raymond Beaughey] (inspecteur général des Mines)、ウジェーヌ・コラス [Eugène Colas]、フォレスチエ [Forestier] (Syndicat des fabricants de Cellloïd)、アンリ・ローラン [Henri Laurain] (ingénieur-conseil de la Société du Gaz de Paris)、フランソワ・ラロッシュ [François Laroche]、フランソワ＝マリ・ルーラン [François-Marie Rouland] (fondateur-administrateur-délégué de la Société du Gaz de Paris)、ポール・コモン [Paul Comment]、レスレ [Roessler]、ティシエ [Tissier] ヴォクト [Vogt] などで構成され、総支配人 [directeur général] は、ジョゼフ・ブッテルラン [Joseph Butterlin] であった。

SAPCの主たる目的は、合成樟脳 [camphre synthétique] を製造することであり、事業は成功の見込みがありそうであった。しかしながら、SAPC設立直後に樟脳価格の暴落が起こった結果、同社は大きな困難に直面した。「戦時中そして休戦後、ボルネオと日本

の樟脳は非常な高価格にまで上昇していた。だから、合成樟脳も大きな利益をもたらす筈であった。ところが、多くの他の商品よりもはるかに急激に樟脳価格の暴落が起こった。1920年初頭に1リーブル(ポンド)当たり20シリングであった樟脳価格は、同年末には6シリングまで下落した⁸⁹と、パリバは指摘した。

このように、SAPCは、ラパリスに所在していたフランス化学工業会社〔SPICEF〕やパンプフ化学製品会社〔SPCP〕の軍需工場であったフェノール工場を平時産業(合成樟脳生産)に転換するために設立されたが、1920年3月に日本を皮切りに勃発した戦後恐慌の煽りで商品(樟脳)価格が暴落することで、不運にも設立(1920年)早々から致命的な打撃を被ることになったのである。それゆえ、1920年12月31日現在で、SAPCに対するBICのポートフォリオ・リスクは、86万フランに達していたのである⁹⁰。

このような化学工業会社へのBICの資本参加〔participations〕について、BIC総支配人J.ペルノットは次のように説明した。「戦時中に我われが資本参加することになったこれら化学工業会社は、中国で戦前ドイツに完全に独占され、その後アメリカ・日本・イギリスとの間で分割されていた巨大な市場である染料〔matières colorantes〕市場の一部奪回のために、我われにとって極めて重要になった。だが、ドイツ人は間もなく復活するであろうが、そこには、地方工場を設置することで重要な地位を中国実業界へ浸透させるチャンスが我われにあるのである」⁹¹と。

(11) ナント電解金属会社〔Société Nantaise électro-chimique et métallurgique, SNECM〕

SNECMは、一部パンプフ化学製品会社〔SPCP〕の電解工場(戦後生産中止されていた塩素工場)の再建を目的として、1920年7月8日に資本金750万フランで設立された。同社の事業目的は、「すべての金属残滓・マット〔matte〕などから金属の回収、とりわけ錫メッキ屑からの錫の回収など」⁹²であった。

SNECMの資本金——額面100フランの株式7万5000株(全額払込)——は、二名の株主によって独占的に引受けられた。すなわち、最大株主はフランス化学工業会社〔SPICEF〕で、6万6376株(全体の88.5%)を、次いで、J. J. カルノー〔J. J. Carnaud〕は6,250株(全体の8.3%)を保有していた。

創業時のSNECM取締役会は、P. ショータル、モルアンジュ〔Morhange〕、〔ジョルジュ〕・

オーコック [[Georges] Aucoc]、J. ラロッシュ [J. Laroche]、スリリエ [Celirier]、コラス [Colas] で構成されていた⁶³。

(12) ゴム金融会社 (Société Financière des Caoutchoucs, SFC ou SOCFIN)

BIC の数多い事業の中で、実業界や証券取引所公認仲買人 [agents de change] の注目を引いたのは、1919 年の BIC によるゴム金融会社 [SFC] の大々的な乗っ取り劇であった。実際、1919 年 3 月に、BIC の証券取引所での売買取引 [opérations] で主導的な役割によって、アンヴェルス [Anvers] に本社を置く SFC の支配権 [contrôle] は、ベルギーのバンジュ [Bunge]・グループから、BIC 頭取 A. ベルトロヤリヴォール商会銀行 [Banque Rivaud, Lebel et Cie] のリヴォー家 [les Rivaud] (場外市場の頭目 [chef de la coulisse]) やアドリアン・アレ [Adrien Hallet] (ベルギーの植民地事業のやり手実業家) などの率いる新金融資本家グループの手に移ったのである。

SFC の創業は 20 世紀初頭に遡る。1904 年に、アンヴェルスの有力商会の一つバンジュ商会 [Bunge et Cie] は、パリ連合銀行 [BUP]、ジュネーブ金融連合 [Union Financière de Genève]、グリサール商会 [maison Grisar] (原材料輸入の大手)、その他数社と合意して、ゴムプランテーション・シンジケート [Syndicat des Plantations de Caoutchoucs] の名の下に「主として既存のプランテーションに従事し、ゴム事業を研究し、ゴム事業に参加するのを目的とした機関[organisme]」を設立しようと考えた⁶⁴。こうして、1906 年に、ゴムプランテーション・シンジケートは、初期資本金 750 万フラン (額面 25 万フランの 30 パーツ [株]) で設立された。コンゴ国 (ベルギー王の所有) が、ブラジルのパラゴム [Hévéa] のベルギー領コンゴへの導入を目的として、この事業への参画の希望を表明したので、同シンジケートの資本金は間もなく 775 万フランに増額された⁶⁵。これまでに獲得された研究と経験を活用すべく、同シンジケートを株式会社に転換することが決定され、1909 年 7 月に SFC は資本金 1000 万フラン——額面 100 フランの株式 10 万株が同シンジケートの初期の全てのメンバーによって引き受けられた——で設立された⁶⁶。SFC 取締役会は、社長のエドゥアール・バンジュ [Edouard Bunge] (Bunge et Cie) ⁶⁷、代表取締役のウィリー・フリリング [Willy Friling]、エルネスト・バンジュ [Ernesto Bunge]、ジュール・バンジュ [Jules Bunge]、アルフレッド・グリサール [Alfred Grisar]、エミ

ル・グリサール [Emile Grisar]、N. アーノルド [N. Arnold]、Ed. シュヌヴィエール [Ed. Chenevière]、W. F. ド・ボワ = マクラール [W. F. de Bois-Maclaren]、M. ド・ラゴテルリー [M. de Lagotellerie]、A. ド・ラントシェール [A. de Lantsheere]、C. J. デン・テクス = ボント [C. J. den Tex-Bondt]、H. E. フェイルディング [H. E. Feilding]、M. S. パリー [M. S. Parry]、H. ライト [H. Wright]、シャルル・ポワールソン [Charles Poirson] (BUP) らで構成されていた⁶⁸。

ゴム価格は激しく変動していたにもかかわらず、SFCは、イギリスの有力会社、東洋国際ゴム生産トラスト [The Eastern International Rubber Produce Trust] (資本金50万ポンド) の協力を得て、多数のゴム関連会社を創設し、それら企業の経営権を掌握した。SFCは、1912年2月に資本金を200万フランに増額したのち、20社以上のゴム会社をひとまとめにして、ゴム関連株の総合持株会社 [omnium] すなわちゴム・トラスト [trust du caoutchouc] となり、以後同社の役割は持株 [portefeuille] の管理と金融・商取引 [opérations financiers et commerciales] に限定するようになった⁶⁹。表16は1918年12月31日のSFCのポートフォリオに登場する主要関連会社(1,000株以上の保有)の一覧表である。

表16 ゴム金融会社(SFC)の資本参加(1,000株以上) (1918年12月31日)

株式数	企業名
6,225	Kuala Lumpur Rubber, [英企業] (1906年5月設立)
5,444	Federated Malay States Rubber Cy, [ベルギー] (1905年8月設立)
25,000	Kuang Rubber Plantations, [ベルギー] (1910年7月設立)
3,750	Société des Plantations de Telok-Dalam, [ベルギー] (1909年8月設立)
9,650	Eastern International Rubber and Produce Trust, [英]
5,000	Sumatra Para
4,000	Consolidated Malay
106,825	Soember Ajoie
11,533	Galang Besar Rubber
4,000	Tamiang
7,750	Medini Rubber
9,335	Cultuur Maatschappij "Waringin", [蘭] (1909年10月設立)
44,000	Tanjong Malim Rubber, [英] (1910年5月設立)
6,500	Tjikadoe Rubber Plantage, [蘭] (1907年7月設立)
11,300	Compagnie des Caoutchoucs de Padang, [仏] (1911年5月設立)

2,925	Glen Bervie Rubber
2,000	Sempah
60,570	Sennah Rubber, [英] (1911年5月設立)
2,000	Pataling
1,000	Straits Rubber
1,000	Brieh
12,150	Piassa Oeloe Rubber, [ベルギー] (1913年12月設立) (株式 [Actions])
4,930	Piassa Oeloe Rubber, (社債 [Obligations])
6,100	Soeka Djadi Estates, [ベルギー] (1913年1月設立)
10,600	Bungsar Estates et Development, [ベルギー] (1913年3月設立)

[Source : "Pour et Contre" du 22 juin 1919 et "La Vie Financière" du 17 juin 1919, AN, 65AQ, 0531 (SFC).]

この表 16 から明らかなように、SFC とそのグループは、マレーシアからインドネシアのジャワ、スマトラにまで広がった大規模なゴム関連企業の集合体であり、SFC はゴム産業の一大コンツェルンを形成していたと言えよう。次の表 17 が示しているように、SFC の営業業績 (1909 ~ 1926 年) は常に好調であったというわけではなく、不況や戦争などに影響され、むしろかなり不規則的であったと言えよう。1909 ~ 10 年の一時的ブーム到来の後、SFC の財政状態は大戦直前 (1913 ~ 14 年) まで徐々に悪化してゆく。大戦中は、とりわけドイツによるベルギー占領の結果、その活動を著しく制限せざるを得なかった。しかしながら、ゴム市場の将来は、戦後 (1920-21 年恐慌による不況を除いて) 極めて有望であったようである。特に戦後アメリカ自動車産業の旺盛な需要のおかげで——事実、1919 年にアメリカは世界ゴム生産のおよそ 70% を購入した——、世界のゴム消費量は急速に増大しつつあったからである。

表 17 ゴム金融会社(SFC)の 営業成績(1909 ~ 1926 年) (単位:1,000 フラン)

営業年度	総収益 [Bénéfices bruts]	純益 [Bénéfices nets]	1 株当たりの配当金
1909-10 ⁽¹⁾	4,423	3,714	15 フラン
1911	3,020	145	7.5 フラン
1912	2,249	1,904	7.5 フラン
1913	2,315	- 718	«
1914	802	- 188	«
1915	1,044	45	«
1916	1,547	1,275	5 フラン
1917	2,753	2,368	8 フラン

1918	3,278	549	10フラン
1919	4,584	1,326	15フラン
1920	4,950	3,337	«
1921	3,985	- 3,520	«
1922	4,068	3,120	«
1923	12,668	10,645	12フラン
1924	13,194	11,707	12フラン
1925	?	?	25フラン
1926	?	?	35フラン

(1) 17 カ月

[Source : "La Cote de Paris" du 13 décembre 1913, "Le Portefeuille" du 5 octobre 1922, "La Vie Financière" du 12 août 1924, "L'Actualité Financière" du 4 juin 1927, AN, 65AQ, O531 (SFC).]

休戦条約締結後、SFCの株価の相対的な低廉さを利用して⁽¹⁰⁰⁾、ベルトロ＝リヴォー [Berthelot=Rivaud]・グループは、目立たぬようにSFC株の組織的購入を行った。アンヴェルスで1919年3月11日に開催されたSFC株主総会で、突発的大事件が起こった。株主総会に提出された6万4975株のうち5万4000株を保有するフランス・グループを代表して、A.ベルトロは次のように宣言した。SFCは「事業への利害が殆ど消滅した名士たち [personnalités] によってではなく、株式の真の所有者によって管理されねばならない」⁽¹⁰¹⁾と。こうしてマジョリティーはひっくり返されたので、Ed.バンジュによって率いられた取締役会は全員辞職し、A.ベルトロ社長の下に新取締役会が組織された。すなわち、副社長にはJ.ペルノット、取締役として、アルベール・メラン [Albert Mailhan] (BIC会計監査役、BCF取締役)、[モーリス]・ド・リヴォー伯 [le comte [Maurice] de Rivaud] (1874-1929)、オリヴィエ・ド・リヴォー伯 [le comte Olivier de Rivaud] (1876-1938)、マックス・ド・リヴォー伯 [le comte Max de Rivaud] (1877-1946)、ジャン・ド・ボーモン伯 [le comte Jean de Beaumont] (1904-2002) ——後者の四名はすべてリヴォー銀行 [リヴォー銀行 [Banque Rivaud et Cie] に属す⁽¹⁰²⁾ ——、エドモン・バルレ [Edmond Barrelet] (パリの銀行家)、ガストン・クラニス [Gaston Clanis] (パリの企業家)、マルセル・ソヴァニャック [Marcel Sauvagnac] らが名を連ねた⁽¹⁰³⁾。1920年に、二人のベルギー人名士、アドリアン・アレ [Adrien Hallet] (1867-1925)⁽¹⁰⁴⁾ (著名なプランテーション経営者、多数の植民地企業創立者) とクレマン・プタン [Clément Peten] ——ランブー

ル〔Limbourg〕選出代議士、久しい以前からプランテーション事業に関与——がこれに加わった⁽¹⁰⁵⁾。

一方で、SFC から排除されてしまったバンジュ〔Bunge〕・グループは、1919年6月にアンヴェルスに新会社、国際金融プランテーション会社〔Société Internationale de Plantations et de Finance, SIPF〕を資本金2000万フランで設立した。そして、同社とSFCとの間で、「それぞれの活動範囲を限定する目的で」合意が成立した。すなわち「この合意によると、ジャワやスマトラで開発・経営している会社——Kuang Rubber Plantations, Compagnie des Caoutchoucs de Padang など——はSFCの支配下に移るのに対して、マレーシアに活動の本拠を持っている会社——Federated Malay States Rubber Cy, Kuala Lumpur Rubber など——は新会社の支配下に移る」⁽¹⁰⁶⁾ というものであった。かくて、これら二社（トラスト）はそれぞれの株券（持株）を交換することによって（表18）、バンジュ・グループとベルトロ＝リヴォー＝アレ〔Berthelot=Rivaud=Hallet〕・グループは、それぞれ自らの勢力圏〔sphère d'influence〕を限定し事業（会社）を集約する——棲み分けをする、あるいは競合を避ける——ことによって、更なる発展の可能性が広がったのである⁽¹⁰⁷⁾。

表 18 ゴム金融会社〔SFC〕と国際金融プランテーション会社〔SIPF〕の株式交換

SFC が SIPF に売却した株券	
5,100	Federated Malay States Rubber Cy (マレーシア)
44,000	Tjikadoe Rubber Plantage (ジャワ)
44,000	Tanjong Malim Rubber (マレーシア)
4,300	Société des Plantations de Telok-Dalam (スマトラ)
6,100	Soeka Djadi Estates (スマトラ)
SFC が SIPF から購入した株券	
40,000	Sennah Rubber (スマトラ)
3,000	Compagnie des Caoutchoucs de Padang (スマトラ)
2,650	Piassa Oeloe Rubber (スマトラ)
1,900	Bungsar Estates et Development (マレーシア)
5,000	Kuang Rubber Plantations (マレーシア)

[Source : AG de la Société Financière des Caoutchoucs du 11 juin 1919, dans "La Vie Financière" du 17 juin 1919 et "Pour et Contre" du 22 juin 1919, AN, 65AQ, 0531 (SFC).]

こうした株式交換によってSFCに正味400万フランの差額金が得られたので、SFCは

コーチシナのモポリ・プランテーション [Plantations de Mopoli] やスマトラ製油工場 [Huileries de Sumatra] ——両社とも A. アレのベルギー企業、パラゴム会社 [Compagnie de l'Hévéa] が管理経営する事業——へ大きな資本参加をすることができた⁽¹⁰⁷⁾。それに加えて、SFC は、リヴォー銀行 [Banque Rivaud] や A. アレと協力して、パリ証券取引所で数々の売買取引を行った。それらの資金を調達するために、SFC は 1919 年に資本金を 2000 万フランから 4000 万フランに倍増させた——額面 100 フランの新株 20 万株を 125 フランで発行した——。その際、BIC とリヴォー銀行は、10 万株の応募を現金であることを保証した⁽¹⁰⁸⁾。1920 年春以来ゴム市場を襲っていた深刻な恐慌にも拘らず、SFC は、主としてパラゴム会社 (資本金 750 万フラン) の管理経営権を獲得するために、1920 年末新たに 1000 万フラン (額面 100 フランの株式 10 万株) の増資をすることを決定した。そのために、SFC は二種類の株券をつくることにした。すなわち、古いタイプの株式 9 万株と発起人株 [actions d'apport] 1 万株——これら発起人株は 1 株当たり 30 票の投票権を持つ——である。これら発起人株 1 万株 (全額払込) は、パラゴム会社 2 万株 (全額払込済み額面 100 フランの株式) の報酬 [代価] として、植民地銀行 [Banque des Colonies]⁽¹⁰⁹⁾ に割り当てられた⁽¹¹⁰⁾。1920 年末の増資時の SFC の主要大株主は次のとおりである (表 19)。SFC の総株式数 40 万株のうち 4 万 136 株 (10.1%) を保有する BIC が圧倒的な筆頭株主であり、リヴォー・グループと J. ペルノットの持株と合わせて 5 万 8374 株、全体の 14.6% を支配して、SFC の指導権を掌握していた事情が窺われるのである⁽¹¹¹⁾。

表 19 1920 年末のゴム金融会社 (SFC) の大株主

主要大株主	株式数 (%)
Banque Industrielle de Chine [BIC]	40,136 (10.1%)
Rivaud, Lebel et Cie (銀行) 6,562	} 17,084 (4.3%)
Comte Maurice de Rivaud 5,261	
Olivier de Rivaud 5,261	
[Société Industrielle et] Financière des Colonies	3,340 (0.8%)
Edmont Barrelet (パリの銀行家)	3,033 (0.8%)
Crédit Suisse	2,561 (0.6%)
Gaston Clanis (パリの企業家)	2,550 (0.6%)

G. Ullmann (パリの貿易商)	2,100 (0.5%)
Comptoir d'Escompte de Genève	1,909 (0.5%)
A. J. Pernotte (BIC 総支配人)	1,154 (0.3%)
Banque de l'Union Parisienne [BUP]	1,000 (0.25%)
計	74,867 (19%)

[Source : "Agence T. Universelle" du 22 décembre 1920, AN, 65AQ, O531 (SFC).]

ベルトロ＝リヴォー・グループによる SFC の掌握以来、SFC のポートフォリオ（持株）の構成は数々の売買取引によってかなり変化していた。表 20 の SFC のポートフォリオ構成はその重要な変化を物語っている。1918 年まで SFC は専らゴム事業の総合持株会社 [omnium] であったが、以後世界に向けてその活動を拡大しつつ、徐々に「油ヤシプランテーションや農業企業一般」にも興味を抱くようになった。他方で、多数の金鉱山会社 [Gold Mines, Rand Mines, Union Corporation] の株式や黒鉛会社 [Société des Graphites et de l'Ankaratra] の株式なども保有するようになった。そこから、SFC はしばしば株の投機をしていると非難されることにもなるのである⁽¹¹²⁾。

結局、「極東にプランテーションを保有するゴム会社、現地での活動、それに由来する商取引が正に我われに興味を抱かした種類の事業であった」⁽¹¹³⁾ と J. ペルノットが言明するように、SFC と関連ゴム産業会社は BIC にとって戦後の最も重要かつ有望な事業の一つだったと言えよう。これまで検討してきた諸企業（BIC に対する債務者）とは反対に、SFC は、1921 年 12 月 31 日の同社貸借対照表において、BIC に対して 90 万 2439 フランもの債権 [créance] を有していたのである。1920-21 年恐慌や BIC の破綻によって一時的に苦境が訪れたものの、SFC は、それ以後も、リヴォー＝アレ [Rivaud=Hallet]・グループの紛れもない金融的中核 [noyau financier] 企業となってゆくのである⁽¹¹⁴⁾。

表 20 ゴム金融会社のポートフォリオの構成 (1,000 株以上) (1920 年 12 月 31 日)

国	株式数	企業名
ヨーロッパ	17,390	Crédit Colonial et Commercial
インドシナ	1,334	Compagnie de La Lagna
	2,316	Société des Palmeraies Mopoli
マレー半島と	11,533	Galang Besar Rubber
	2,150	Glen Bervie Rubber
マレーシア	4,000	Plantations de Johore (parts)

マレー半島と マレーシア	24,900	Kuang Rubber Plantations
	12,926	Malacca Rubber
	23,000	Campagnie du Selangor
	77,000\$	Obligations, Yarak Rubber
	220,579	Soengei Arak Rubber
スマトラ	3,000	Huileries de Deli
	19,500	Huileries de Sumatra
	43,612	Compagnie des Caoutchoucs de Padang
	113,828	Sennah Rubber
	18,056	Soengei Lipoe Cultuur Maatschappij
ジャワ	14,519	Cultuur Maatschappij "Waringin"
	1,640	Madjau (filiale de "Waringin")
	1,050	Kawi Cultuur Maatschappij (filiale de "Waringin")
	4,400	Cultuur Maatschappij Radja Poetri (filiale de "Waringin")
	9,356	Medini (filiale de "Waringin")
象牙海岸	1,600	Huileries Africaines
白領コンゴ	1,800	Palmeraires Congolaises
マダガスカル	8,000	Société des Graphites et de l'Ankaratra
南アフリカ	8,500	Gold Mines
	13,225	Rand Mines
	13,150	Union Corporation
トラスト 他	20,000	Compagnie de l'Hévéa
	5,350	Eastern International Rubber and Produce Trust
	11,000	Zambesiea Exploration
	1,000	Rubber Sponges

[Source : AG de la Société Financière des Caoutchoucs du 12 juin 1921, AN, 65AQ, 0531 (SFC).]

(13) M'Zaita 燐鉱石会社 (Société des Phosphates de M'Zaita) (アルジェリア)

同社 (資本金 1000 万フラン) は、アルジェリアのコンスタンチヌ地方・トクヴィル地区 [région de Tocqueville, province de Constantine] の Djebel M' Zaita 燐鉱石鉱山を 1910 年以来開発している会社で、香水王ルシアン・ディオール [Lucien Dior] ——ブリアン内閣・ポワンカレ内閣の商工業相 (1921-24 年)、マンシュ県選出代議士 (1906-32 年) ——の従弟のモーリス・ディオール [Maurice Dior] によって率いられていた。同社取締役会には J. ペルノットとフランソワ [François] が席を占めていた。BIC は、組合持分 [parts syndicales] として 4,000 パーツ [part] (1 パーツ当たり 250 フラン) を所有していた。ゴム金融会社 [SFC] と同様に、同社は 1921 年に BIC へのおよそ 100 万フランの債権者

であった。SFCと同様に、リヴォー銀行〔Banque Rivaud, Lebel et Cie〕はこの事業に関与していた。というのは、SFCは1921年に額面100フランの同社株7,070株（全体の7%）を保有していたからである⁽¹¹⁵⁾。

(14) 西部製材一般会社〔Société Générale des Chantiers de l'Ouest, SGCO〕

同社は1919年11月11日に資本金1500万フラン——額面500フランの株式3,000株、全額払込——で設立された。同社は、アヴリエの森〔forêt d'Avrillé〕を開発経営する目的で、アンドル＝エ＝ロワール県のランジェ〔Langeais〕近郊に三つの製材所〔Scierie〕を保有していた。同社取締役会は、ステファン・ルー＝ボードラン〔Stéphane Roux-Baudrand〕（企業経営者）、モーリス・ブリオール〔Maurice Bouliol〕（退役大佐）、ジャン・ルージュリー〔Jean Rougerie〕（金利生活者）で構成されていた。BICは、S.ルー＝ボードランの主導する別の二会社、農林開発会社〔Société d'exploitations agricoles et forestières〕と木工製作会社〔Société d'entreprises de constructions en bois〕にも特別に厚遇・支援していた⁽¹¹⁶⁾。BICは同社の全株に近い2,980株（全体の99%）を保有し、そのうえ、1920年に500万フラン、1921年6月に700万フランの信用貸しを行っていた（表12参照）。また、1920年12月31日の同社〔SGCO〕に対するBICのポートフォリオのリスクは、155万2000フランも存在した⁽¹¹⁷⁾。

(15) ラ・クルヌーヴ鑄造・機械製作会社〔Société des Constructions Mécaniques et Fonderies de La Courneuve〕⁽¹¹⁸⁾

同社は、ジョンソン商会〔Maison Johnson〕を継承して、1917年資本金125万フランで設立された。1920年に資本金は500万フランに増額された——1920年には500万フランの社債（5.5%）を発行——。同社はラ・クルヌーヴの工場で主としてマシンや機械部品の製造を行っていた。同社取締役会は、社長のガストン・ジョンソン〔Gaston Johnson〕以下、J.ジョンソン〔J. Johnson〕、H.パオリ〔H. Paoli〕、Ch.グジョン〔Ch. Goujon〕、G.ベイルー〔G. Beyroux〕、フランツ・シャルレ〔Franz Charlet〕、A.ベック〔A. Becq〕、P.デマ〔P. Desdmaps〕などで構成されていた。1919-20年度（7か月は資本金125万フラン、その後資本金500万フラン）の利益は99万1000フランであったが、同社のBICに対す

る負債は、1920年12月31日に210万フラン、1921年4月30日には590万フランに激増した。また、1920年12月31日の同社に対するBICのポートフォリオのリスクは443万6000フランも存在していた。こうした状況から、同社は1921年6月3日にセヌ商事裁判所に会社更生の手続きを取らざるを得なかった。だが、結局、会社の再建に失敗して、1926年1月8日に破産宣告することになるのである⁽¹¹⁹⁾。

(16) 旧サツシャ商会会社 (Société des anciens Etablissements Sacha)

同社は、1920年8月4日に資本金150万フランで設立された。額面100フランの株式1万5000株が発行され、その三分の一の5,000株が発起人株として創立者、クロード・ド・サン＝ファール [Claude Saint-Phalle] とアレクサンドル・ド・サン＝ファール [Alexandre Saint-Phalle]⁽¹²⁰⁾——二人の内どちらかはJ.ペルノットの秘書であった——に分配された。同社の最初の取締役会は、A.ド・サン＝ファール、A.ガリュセール(SMCF創業者)、ロベール・ポルジェス [Robert Porgès] で構成されていた。BICは同社資本金の10%、すなわち1,500株を引受ける一方、BICは同社に信用貸しを1920年末に48万フラン、1921年6月に51万フラン行っていた⁽¹²¹⁾。

(17) フランス・エヴェイユ社 (L'Eveil Français)

同社は、1917年8月30日に資本金300万フランで設立された保険会社である。資本金は、1919年に500万フラン、翌1920年には一挙に三倍の2500万フラン（額面500フランの株式5万株、1/4払込）に増額された。BICは、同社の総株数（5万株）の78.6%、すなわち3万9297株——うち「B」株（記名株、発行受益権 [jouissance émission]）2,000株と「A」株（記名株、普通受益権 [jouissance courante]）37,297株——を保有し、同社を完全な子会社としたのである⁽¹²²⁾。

(18) パリ工業銀行 (Banque Industrielle de Paris)

同銀行は、1918年に資本金100万フランで設立され、1920年5月に資本金は一挙に5倍の500万フランに増額された——その後、資本金はさらに5倍の2500万フランへの増額が決定された——。最初の会計年度（18か月間）の損益は純益13万1000フ

ランで、普通株には8.28%、発起人株には10%の配当が行われた。同銀行は一般の評判もよく、(中期)融資も手堅く行われている。同銀行の取締役会は、A. グーヌイユー [A. Gounuillou]、ドニ・リカール [Denis Ricard]、ルネ・ド・セランヴィル [René de Cérenville] (BIC 取締役)、G. ブラジェアス [G. Bourragéas] などで構成されていた。だが、1920年12月31日での同銀行に対するBICのポートフォリオ・リスクは、156万フランにも達していたのである⁽¹²³⁾。

(19) フランス中央銀行 (Banque Centrale Française、BCF)

BCFについてはこれまでに触れてきたが⁽¹²⁴⁾、ここでは特にBICとBCFの関係性に注目して、BCFの沿革を概観しよう。BICにとってBCFの重要性は、BICの株式「市場を維持する」という役割にあった。つまり、BCFはパリ証券取引所において、特に増資の際などにBIC株の相場を安定的(あるいは高位)に保つという役割を担っていたのである。金融週刊誌『コメンテール [Commentaires]』はこの操作 [opération] を次のように説明している。「BICは、諸銀行が自ら実行できないことを友好銀行 [maison amie] にやってもらおう。各々の大預金銀行は、適時注文を満たすために必要な株を市場にもたらしたり、あまりにも急な買付 [offres] を急いで『抑え [ravalier]』るための、小さな『BCF』をそれぞれもっている。これが市場を維持する [tenir un marché] 仕方である。補助銀行 [banque auxiliaire] は買い手とか売り手として現れるが、真の買い手とか売り手は、株券を取引し、公然とした介入権を持たない会社である」⁽¹²⁵⁾と。実際、BCFは、「とりわけ1920年7月以降、買手のつかない[BIC]株をパリ証券取引所で買戻すことによって、BIC株の相場を支える役割を担っていたようである」⁽¹²⁶⁾。

BCFは、1905年12月16日に資本金300万フラン(額面250フランの株式1万2000株)でパリ(23, rue Taitbout)に設立された。3000パーツの発起人持分 [parts de fondateur] が発行され、創立株式の応募者に4株につき1株の割合で発起人株が配分された。創業時の取締役会は、代表取締役社長(頭取)のレオン・ヴォワラン [Léon Voirin] (技師)を筆頭に、レオン・ド・モントルイユ男爵 [le baron Léon de Montreuil]、ベルナール・ヴァン・ヴェールセン [Bernard van Veersen] (技師)で構成されていた。1907年2月28日のBCF取締役会報告は、銀行設立に大きく関与した思

想や計画を次のように明言した。「預金・割引・信用銀行の設立が問題ではなかった。なぜなら、この分野に特化して強力な組織を有している大預金銀行は、新規参入者に殆どその場所を残していないからである。我われは、事業銀行のように、大預金銀行のそばに、ある一定の地位を占めるべきであり、我われの資本金が小さいので、少なくとも今のところ大規模な取引の実現を目指すのを禁じられているとするならば、同様に広大で多分より利益の上がる別の活動分野が、大銀行に興味を持たせるにはあまりにも小さやかで重要性の劣る事業のために事業の開始やその発展に必要な資金を提供することによって、我われの活動のために開かれたままであろう。従って、フランス資本家に提案するために、フランス内外の最上の事業を探索・研究すること。フランス工業に不足している資金や、外国法の下におかれることで、フランス資本家にとって極めて不利な条件でしか得られない資金を提供することによって、フランス工業の設立や発展への援助を鼓舞すること。フランス資本によく研究されよく計画された事業を提示し、利益の上がる条件でフランス資本を使用する機会を提供すること。以上が推奨される目的である」⁽¹²⁷⁾。

こうした精神に基づいて、BCFは1906年3月に資本金160万フランの自動車会社、シュナール=ヴァルカー社〔Société des Anciens Etablissements Chenard et Walcker〕を設立した。同年に、BCFは同社資本金の220万フランへの増額への参加とともに、ベルギーの石炭会社、ル・クシャン・デュ・フレニユ石炭会社〔Le Couchant du Flénu〕の増資にも参画した⁽¹²⁸⁾。

翌1907年にBCFは、石炭・鉄・銅・その他全ての鉱物の採掘・開発を目的とする石炭鉱山中央会社〔Société Centrale des Mines et Charbonnages〕（資本金300万フラン）とフランス西アフリカ会社〔Compagnie de l'Ouest Africain Français〕——社長は元コートジボアール総督ギュスターヴ・バンジェ〔Gustave Binger〕——を設立した⁽¹²⁹⁾。1907～1908年の産業金融不況によって、BCFとその事業の発展が抑制された⁽¹³⁰⁾。市場の不振状態が続いたけれども、BCFは1909年に資本金100万フランの自動車商会〔Comptoir Automobile〕を設立した⁽¹³¹⁾。1907不況以来、BCFの工業事業は自動車産業を除いて——シュナール=ヴァルカー社と自動車商会は繁栄のさなかにあった⁽¹³²⁾——、不振であった。その上、「1911年7月に起こったアガディール事件後、通商金融事業に深刻な影響を1912年初頭にまで与えた、1911年下半期の国際政治状況」⁽¹³³⁾を理由に、BCFは1911

年にその政策を転換させた。すなわち、「これまでわが社が専ら取り組んできた産業事業〔affaires industrielles〕の調査研究を放棄することなく、我われは、一定の利益を確保することが可能な銀行業と証券取引所の取引業務〔opérations〕を発展させることに決定した」⁽¹³³⁾。しかしながら、BCFのこうした努力は、「1912年を特徴づけ、今尚世界経済を麻痺させている経済金融危機をもたらした、国際政治の重大な出来事」⁽¹³⁴⁾によって成果の出ないままであった。「この予見不能の恒常的に不安定な環境は、とりわけ活動と信頼で生きている我われのような事業銀行にとって、預金・割引銀行〔établissements de crédit et d'escompte〕よりもとりわけ一層不利であった」と、1913年のBCF株主総会報告は説明した⁽¹³⁴⁾。危機は、1913年に「ほぼ完全に金融市場を麻痺させ、新事業の契約を不可能にならしめて」⁽¹³⁵⁾加速化した。「我われが創業以来大きな関心を抱いてきた多数の鉱山開発・探索事業は、我われが期待していた成果を出せなかった」⁽¹³⁵⁾。すなわち、石炭鉱山中央会社やル・グシャン・デュ・フレニユ石炭会社やフランス西アフリカ会社は次々と清算せねばならなかった。加えて、BCFと信用補助会社〔Société Auxiliaire de Crédit〕(旧 Ch. ヴィクトール銀行)の間に存在する経営陣と利害の共有を考えれば、1914年1月のCh. ヴィクトール(信用補助会社)の破綻はBCFの状況をますます悪化させた。1913年会計年度に200万フランの欠損を出したBCFは、1914年7月に資本金を120万フラン(額面100フランの株式12,000株)に減資せざるを得なかった⁽¹³⁶⁾。それにも拘らず、BCFは1913年にマダガスカル西洋会社〔Compagnie Occidentale de Madagascar (Suberbie)〕やBIC(4,000株の引受け)に資本参加した。そして、1914年5月に、レオン・ヴォワランの仲介で、BCFは「信用補助会社が最初に引受けたBIC株の大部分」⁽¹³⁷⁾を買い取ったのである。

戦後BCFは、にわか景気に便乗して、1919年12月10日に資本金を500万フラン(額面100フランの株式50,000株)に増額し、1920年8月5日には1000万フラン(額面100フランの株式100,000株——12,000株は全額払込済、88,000株は1/4払込——)に増額した。次に、BCFの配当金の支払い状況(表21)と株式相場(表22)を示すと、戦後のBCFの業績はそれなりに好調であったようだ。1919年会計年度で、BCF取締役会は1914年戦争の非常事態に基因する財務状態を完全に清算することができた。そして、BCFは戦争によって妨げられていた取引業務の発展を再開することができた。すなわち、BCFは

産業事業や植民地事業に直接関心を抱き、同様の企業を目的とする様々なシンジケートの起債に出資したのである⁽¹³⁸⁾。

表 21 フランス中央銀行(BCF)の配当金支払い(1912～1919年)〔単位:フラン〕

年度	株式 [Actions]	発起人持分 [Parts]
1912	7.5	Néant
1913 à 1916	Néant	Néant
1917	5	0.50
1918	8	3.42
1919	9.29	8.26

[Source : [Note sur la] Banque Centrale Française, Archives Historiques de BNP Paribas, Fonds CNEP, 73AH/297 (BIC)].

表 22 フランス中央銀行(BCF)の株式相場(Cote Desfossés)〔単位:フラン〕

年度	株式 [Actions]		発起人持分 [Parts]	
	最高値	最低値	最高値	最低値
1912	sans cours		sans cours	
1913	150		25	
1914	70		48	
1915	78	45	48	
1916	sans cours		sans cours	
31 déc. 1917	78		18	
1918	sans cours		10	
1919	sans cours		sans cours	
31 déc 1920	202		209	

[Source : [Noté sur la] Banque Centrale Française, Archives Historiques de BNP Paribas, Fonds CNEP, 73AH/297 (BIC)]

戦後も BCF は、BIC の増資の度に大量の株を取得した——1919 の増資時に 4,793 株、1920 年の増資時に 25,859 株、合計で 34,652 株（BIC 総株数の 11.6%）。これに信用補助会社から取得した BIC 株を加算しなければならない——⁽¹³⁹⁾。他方、BIC の側では、BCF の増資の度に発行された新株の大部分を取得した。かくて、BIC は 1919 年末で BCF 株を 31,468 株（総株数の 63%）、1921 年には 78,022 株（総株数の 78%）を所有して⁽¹⁴⁰⁾、BCF 経営の支配権を完全に掌握していた。そのうえ、BIC は BCF に 1920 年末で 1060 万

フラン、1921年6月で1160万フランの貸越〔découvert〕も行ってた。最後に、BCFの経営陣について言及すると、BCFの頭取職は創業以来次のように継承されてきた⁽¹⁴¹⁾。

フランス中央銀行〔BCF〕頭取名	頭取在職期間
レオン・ヴォワラン〔Léon Voirin〕、技師〔Ingénieur〕、 ダカス将軍〔Le Général Dacasse〕	1905～10年 1910～11年
シャルル・ヴィクトール〔Charles Victor〕、銀行家、SAC社長	1911～14年
ベルナール・ヴァン・ヴェールセン〔Bernard van Veersen〕、技師 レオン・ヴォワラン	1914～16年 1916年以降

また、1921年のBCF取締役会は頭取L.ヴォワラン以下、次のような取締役で構成されていた⁽¹⁴¹⁾。

ウジェーヌ・アンリ〔Eugène Henry〕：元BIC副頭取、シュナール=ヴァルカー社取締役
レオン・ド・モントルイユ男爵〔le baron Léon de Montreuil〕： シュナール=ヴァルカー社取締役、BIC大株主
アルベール・メラン〔Albert Meilhan〕：BIC会計監査役、SFC取締役

(20) 新聞・書店新社〔Compagnie Nouvelle de Presse et de Librairie〕

BICはジャーナリズム界に少なからず利害を有していた。その一つである新聞・書店新社は、所有していた“*La Lanterne*”⁽¹⁴²⁾と“*Bulletin de Paris*”⁽¹⁴³⁾の二つの新聞を「再建するための必要な資金」を見出すために1918年末困難な財政状態にあったが、BICと太平洋海運商業会社〔SMCP〕によって救済された。その結果、同社の30万フランの資本金（1株当り5000フランの株式60株）は、BICと太平洋海運商業会社〔SMCP〕によって半分ずつ分割された。こうした資本参加の後、A.ガリュセールは同社の取締役会に参加した。その上、BICは同社に1919年末で566,824フラン、1921年6月で809,000フランの貸越を行っており、他方、BICは“*La Lanterne*”にも1921年6月で196,000フランの貸越を行っていた⁽¹⁴⁴⁾。

他方で、カミーユ・エマール〔Camille Aymard〕⁽¹⁴⁵⁾が『ラ・リベルテ〔*La Liberté*〕』紙——エミール・ド・ジラルダン〔Emile de Girardin〕によって1866年に創刊された伝統ある新聞——を購入するための会社を1920年5月に設立したときに、BICは彼に財政的支援を行った。かくて、同社の代表取締役C.エマールは、1921年4月のBICの貸越口

座に 272,962 フランの債務を保有していた。また、彼の『ラ・リベルテ』紙も同様に BIC に 185,688 フランの債務を有していたのである⁽¹⁴⁶⁾。

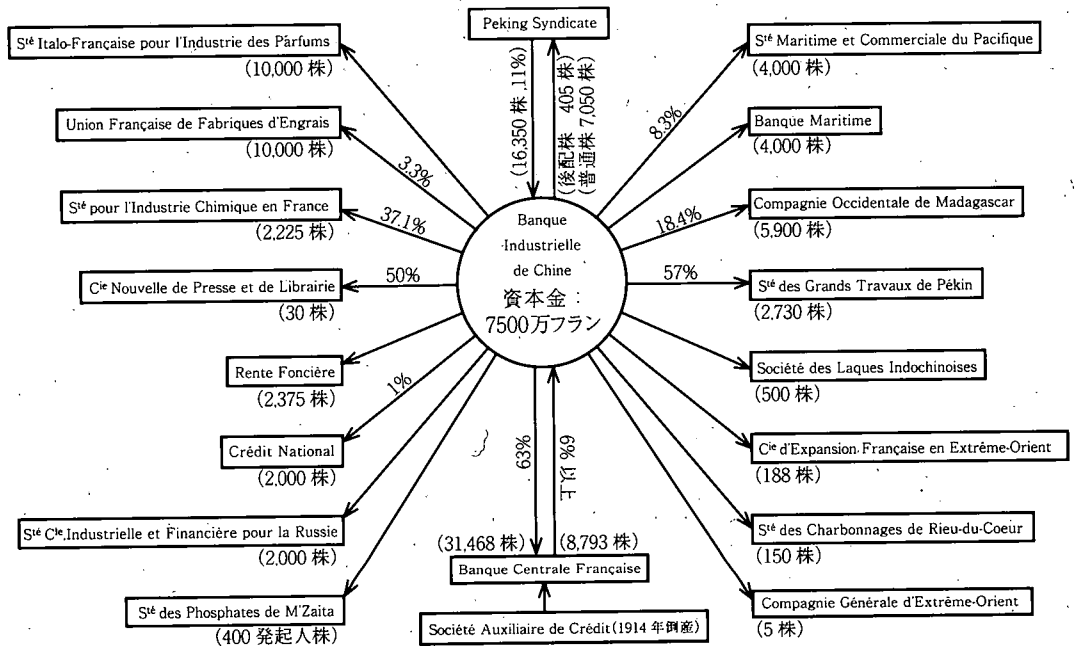
このように、戦後の BIC は、とりわけ SMCP、SMCF、SMF などの新興海運貿易会社、SPICEF、SPCP、UFFEPCP などの戦中から続く化学製品会社の平和産業への再編企業、戦中から関与していたラ・クルヌーヴ鑄造・機械製作会社など鉄鋼・機械製造会社や SGCO など木工会社の再編企業、等々に特別の支援・融資を行ってきた。これら企業の発展は戦後フランスの経済復興・発展にとって不可欠なものであったとはいえ、これが取りも直さず BIC の巨額の資本の固定化を促進してきたのである。

さらに、これに加えて既に検討してきたように⁽¹⁴⁷⁾、BIC が戦前・戦中から特別に厚遇していた企業や顧客として、1921 年以降事実上の破綻状態に陥る海外の有力建設造船会社、ブロッサル＝モパン社 [Brossard, Mopin et C^{ie}] を始め、ステファン・ルー＝ボードラン [Stéphane Roux-Baudrand] の木工製作会社 [Société d'Entreprises de Constructions en Bois] や農林開発会社 [Société d'Exploitations Agricoles et Forestières]、デュソル食品会社 [Société des Produits Alimentaires Dusol]、大豆・副産物開発会社 [Société pour l'Exploitation du Soja et de ses Dérivés]、インドシナ鉱脈探査工業研究会社 [Société Indochinoise de Recherches minières et d'Etudes industrielles]、BIC 取締役 A. フレズール [Antoine Frézouls] の国際植民地信用銀行 [Crédit International et Colonial] ——1920 年 12 月に破産状態に陥る——などへの支援・融資も忘れてはならない。

これら以外にも、戦後 BIC は様々な企業・銀行・事業に関心を持ち、投資額ばかりでなく投資の範囲・地域や枠を著しく拡大していった。実際、1919 年度の BIC の貸借対照表の保有証券 [Portefeuille-titres] や資本参加 [Participations financières] の項目には、1334 万フラン以上の金額が記載され、その明細は、“Rente Foncière” (2,375 株)、“Compagnie Occidentale de Madagascar” (5,900 株)、“Société des Grands Travaux de Pekin” (2,730 株)、“Société Italo-Française pour l'Industrie des Parfums et des Produits Chimiques” (10,000 株)、“Banque Maritime” (4,000 株)、“Société Commerciale, Industrielle et Financière pour la Russie et les Pays limitrophes” (2,000 株)、“Crédit National” (2,000 株) ——1919 年に資本金 1 億フランで設立された半公共的機関——、“Société des Laques Indochinoises”

(500株)、“Campagne d'Expansion française en Extrême-Orient”(188株)、“Société des Charbonnages de Rieu-du-Coeur”(150株)、“Thomson-Houston”(90株)等々となる⁽¹⁴⁸⁾。これらの資本参加を加えて、1919年12月31日現在のBICの主要な資本参加を図示すると図1のようになる。

図1 中国興業銀行(BIC)の資本参加(1919年12月31日現在)

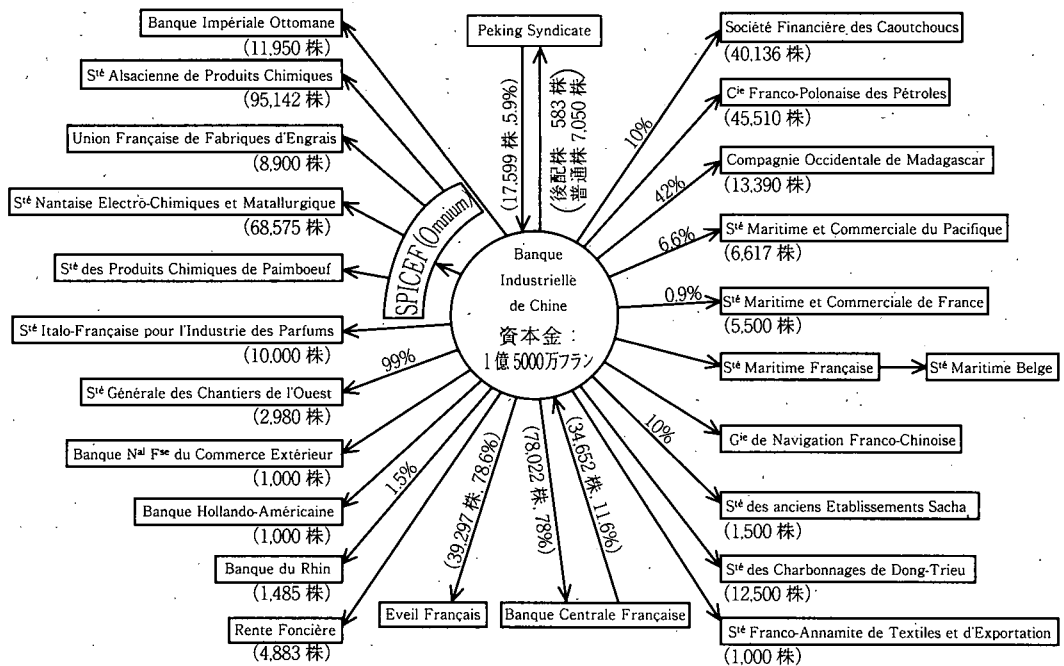


(括弧内の数値はBICの保有株数、%はBIC保有株数の総株式数に占める割合を示す)

BICの貸付や投資活動は、1920年に入っても衰えるどころか、増資によって新たな資金を獲得したせいもあってか、一段と活発になった。図2は1920年末のBICの資本参加による金融グループ〔groupe financier〕の形成を示している。そこには、BICが新たに資本参加した企業・銀行・事業が多数登場している⁽¹⁴⁹⁾。すなわち、“Banque Impériale Ottomane”(11,950株)、“Société pour l'Industrie des Parfums”(3,400株)、“Banque Nationale Française du Commerce Extérieur”(1,000株)⁽¹⁵⁰⁾、“Banque du Rhin”(1,485株)⁽¹⁵¹⁾、“Banque Hollando-Américaine”(1,000株)⁽¹⁵²⁾、“Société des Charbonnages de Dong Trieu”(12,500株)⁽¹⁵³⁾、“Société Franco-Annamite de Textiles et d'Exportations”(1,000株)、“Compagnie Franco-Polonaise des Pétroles”(45,510株)などである。かくして、1920年末にはBICを中核とする一大金融・

企業グループを形成していたことが窺えるであろう (図2参照)。BICは、創業以来僅か7年にして、資本金においてライバルの半公的植民地銀行・インドシナ銀行——1920年2月の増資により資本金7200万フランとなる——のおよそ二倍、バランスシート総計額で同行に匹敵する規模の大銀行にまで成長したのである。

図2 中国興業銀行〔BIC〕のグループ・資本参加 (1920年末)



(括弧内の数値は BIC の保有株数、%は BIC 保有株数の総株式数に占める割合を示す)

その他にも、図2に表示しきれなかったBICの様々な業種への資本参加、“Journal des Débats” (400株)、“Campagne des Caoutchoucs de Padang” (298株)、“Société Immobilière de l'Union Interalliée” (2000株)、“Société Lorraine Minière et Métallurgique” (250株)、“Société de peignage de Reims” (500株)、“Campagne Standard Franco-Américaine” (100株)などが存在する。さらには、“Syndicat Minier du Pacifique” (£ 6,383) “Banque Croatia d'Escompte” (KR. Y. S. 2,000,000、5000株)、“Banque de Crédit Roumain” (Leis 2,369,119 [1,633,875])、“Plantation de Ramoneia” (Fl. 500,000、“Soengei Lipoe Cultuur Maatshappij”の3,000株によって清算)、“Société des Frigorifiques d'Extême-Orient” (19,000株)、“Compagnie d'Exploitation des Chemins de fer orientaux” (3,504株)、“Société des Charbonnages de Trifail”

(5,000株)、“Syndicat Minier du Pacifique”(18,385株)など、多数のシンジケートへの参加〔participations syndicales〕も見逃せない⁽¹⁵⁴⁾。

他方で、植民地省の〔1921年の〕文書〔Note〕には、BICのインドシナでの投資活動について次のように言及されていた。すなわち、「ブロッサール＝モパン社（造船業）、ハイフォン機械製作株式会社〔Société Anonyme de Constructions mécaniques de Haiphong〕、ハイフォン製鉄会社〔Société des Hauts Fouraux d'Haiphong〕、アンチモン会社〔Société de l'Antimoine〕、トンキンの精米会社、多数のコーヒー・プランテーション、黒鉛事業、等々のようなインドシナにおける大多数の事業はBICによって融資されていた⁽¹⁵⁵⁾」と。

このようなBICの資本参加の飛躍的拡大は、上述した如く、主として1919～1920年の極めて旺盛な営業・投資活動とBICが供与した当座貸越との交換に顧客から譲り受けた有価証券などに起因するものであった。1921年7月25日のBIC取締役会報告は、資本参加の項目の急激な増加の理由を次のように説明した⁽¹⁵⁵⁾。「いくつかの資本参加は、貸付〔créances〕を清算したり割引いたり〔mobiliser〕することができない顧客を支援するために、応募証券、社債あるいは株式で〔BICに〕もたらされたものであった」。そして、「すべての興業銀行〔banques industrielles〕は、経済危機の時には、それぞれの保有証券——経済が回復すると金融市場に流通することになる——をこのように膨張させる危険にさらされているのである⁽¹⁵⁶⁾」と。

つまり、1919～1920年のBICの資本参加や貸付金の急激な拡大は、当然のことながら資本の固定化をもたらし、ひとたび不況や経済危機が到来するや、BICの致命的な重荷となりうる危険を孕んでいたのである。

おわりに

最後に、BICの貸借対照表〔Bilan〕(1913～1920年)の各項目の年代的推移を検討して、BICの発展の特徴を概括してみよう(表23、表24参照)。資本の固定化〔immobilisation〕の点から言えば、BICの資本参加は、確かに多数で大量であったが、BICの供与した巨額の信用貸し(当座貸越)と比較するならば、それほどのもではなかったとも言えよう。BIC貸借対照表の借方〔Actif〕において(表23)、保有証券・資本参加〔Portefeuilles-titres et Participations financières〕の項目は、1919年末の2540万フランから、1920年6月30

日の5900万フラン、1920年末の1億8240万フラン——内訳として、フランス国庫証券〔Bons du Trésor français〕は1700万フラン、中国国庫証券〔Bons du Trésor chinois〕は4200万フラン、極東の証券〔valeurs d'Extrême-Orient〕は6300万フラン、ヨーロッパの証券〔valeurs européennes〕は6000万フラン——と著増したが⁽¹⁵⁷⁾、他方、当座借方勘定〔Comptes courants débiteurs〕も、1919年末の1億2250万フランから、1920年6月30日の2億9300万フラン、1920年末の3億509万フランと激増した。また、様々な貸付〔Avances diverses〕も、1914年の3160万フランから、1918年の1億1220万フラン、1919年末の2億8260万フラン、1920年6月30日の2億9600万フラン、1920年末の3億780万フラン——内訳として、口座預金担保〔avances sur comptes courants〕の貸付は1億1700万フラン(全体の57%)、証券担保の貸付〔avances sur titres〕は4000万フラン(13%)、商品担保の貸付〔avances sur marchandises〕は3500万フラン(11%)、約束手形担保の貸付〔avances sur promissory notes〕は5000万フラン(16%)、手形担保の貸付〔avances sur effets〕は700万フラン(2%)——へと、1918年以降劇的に増大した⁽¹⁵⁸⁾。この最後の2項目(当座借方勘定と様々な貸付)は、当座貸越(信用貸し)の温床だったのである。

BIC貸借対照表の貸方〔Passif〕においては(表24)、とりわけ、1918年以來の預金口座〔Comptes courants de dépôts〕、とりわけ一覽払い当座勘定〔Comptes courants à vue〕の増加が顕著であった。この預金量の激増は、既に指摘したように⁽¹⁵⁹⁾、非常に高い銀行利子を「餌〔l'appât〕」にして実現された。BICが、即座の引出要求があるかもしれないのに、これら預金を長期の信用取引(資本参加、合資会社並みの出資・貸付、など)——これは利益が上がるけれども危険な取引〔opérations〕——につき込むようになったのは、これらの費用のかかる資金に相当する金利の利益を確保するためだったのである。実際、BICは、正に工業商業合資会社の色合いを持つ信用貸し〔crédites〕を「その企業を倒壊させないために、供与した当座貸越しの償還を要求することをしない」⁽¹⁶⁰⁾企業に、大量にもたらしたのである。それゆえ、ある程度長引くような経済危機が突発すると、BICは、財政困難な状況の企業を救うために、極めて高いリスクを伴った長期信用取引を行うという抜き差しならぬ状況に巻き込まれざるを得ないのである。一旦コミットしてしまると、この罠〔trappe〕からは容易に抜け出すことができないのである。

表 23 中国興業銀行 (BIC) の貸借対照表 (借方)、1913 ~ 1920 年 (単位: 100 万フラン)

Actif	1913	1914	1915	1916	1917	1918	1919	1920
Capital restant à appeler	33.6	33.5	33.5	33.4	33.0	22.0	35.6	68.4
Espèces en Caisse	0.2	0.3	2.5	7.6	7.0	23.2	77.9	95.1
Espèces en Banque	—	22.4	23.0	46.3	49.0			
Correspondants débiteurs						66.7	105.5	61.5
Portefeuilles-effets				8.9	47.4	65.3	235.5	230.8
	12.2	5.3	6.6	(14.9)	(57.7)	(78.4)	(260.9)	(413.2)
Portefeuilles-titres et Part ^{ons} fin ^{ères}				6.0	10.3	13.1	25.4	182.4
Comptes courants débiteurs	—	—	—	—	—	—	122.5	305.9
Avances et Reports	5.3	—	—	—	—	—	—	—
Avances diverses	—	31.6	27.8	43.9	64.6	112.2	282.6	307.8
Débiteurs divers	0.1	1.9	3.6	10.0	12.4	47.8	31.2	88.3
Comptes d'ordre débiteurs				1.2	5.0	2.2	118.0	21.4
Immeubles								70.8
	2.4	2.7	3.2	5.1	8.0	13.0	41.8	(81.0)
Matériel et Mobilier								10.2
Frais de construction	1.3	0.9	—	—	—	—	—	—
Corresp ^{ts} , NC de Recouvrements	—	—	—	—	—	—	—	25.8
Effets à l'encaissement	—	—	—	—	—	—	—	48.5
Débiteurs par acceptation	—	—	—	—	11.0	15.0	13.5	30.8
Profits et Pertes	—	—	—	—	—	—	—	1.3
Totaux	55.0	98.8	100.0	162.3	247.6	380.4	1089.7	1548.9

[Source : Rapport d'André Poisson sur la BIC (déposé le 22 juillet 1921) pour le ministère des Finances, MAE(SE, AO), Chine, vol. 98, folio 75 ; AN, 65AQ, A366¹⁻² (BIC) より作成]

表 24 中国興業銀行（BIC）の貸借対照表（貸方）、1913～1920年（単位：100万フラン）

Passif	1913	1914	1915	1916	1917	1918	1919	1920
Capital	45.0	45.0	45.0	45.0	45.0	45.0	75.0	150.0
Réserve légale	—	—	0.2	0.3	0.4	0.5	0.8	1.5
Fonds de prévoyance	—	—	0.1	1.3	1.5	2.0	3.0	6.0
Réserve spécial pour dépréciation	—	—	—	0.5	0.8	1.0	1.5	1.5
Fonds d'amortissement	—	—	—	—	0.1	0.1	0.4	1.0
Réserve spécial	—	—	—	—	—	—	0.9	25.7
Réserve immobilière	—	—	—	—	—	—	—	3.0
Comptes courants à vue	—	1.1	5.1	20.4	73.1	173.2	675.7	509.0 (855.4)
Comptes courants de dépôts	—	—	—	—	—	—	—	346.4
Billets de banque émis	—	—	—	—	—	—	—	34.0
Effets à payer	5.7	0.3	0.3	0.2	0.3	1.2	6.4	55.8
Correspondants créditeurs	—	—	—	30.6	18.6	28.1	68.8	74.2
Créditeurs divers	0.1	2.1	3.6	12.3	8.2	32.6	77.4	123.6
Comptes d'emprunt	—	45.0	40.8	42.9	83.9	73.7	146.8	Néant
Comptes d'ordre créditeurs	—	—	—	—	—	—	—	110.2
Frais de construction	1.3	0.9	—	—	—	—	—	—
Immeubles, Compte Annuité	1.9	1.9	1.9	1.8	1.8	1.8	3.3	Néant
Effets négociés	2.0	—	—	—	—	—	—	—
Clients «Encaissement»	—	—	—	—	—	—	—	74.3
Acceptations à échoir	—	—	0.1	4.8	11.0	15.0	13.5	30.8
Profits et Pertes	0.3	3.4	2.1	2.3	2.9	6.0	16.2	2.0 ⁽¹⁾
Totaux	55.0	98.8	100.0	162.3	247.6	380.4	1089.7	1548.9

(1) Report de l'exercice 1919.

[Source : Rapport d'André Poisson sur la BIC (déposé le 22 juillet 1921), pour le ministère des Finances, MAE(SE, AO), Chine, vol. 98, folio 75 ; AN, 65AQ, A366¹⁻² (BIC) より作成]

注

- (59) A.-J. Pernotte, *Pourquoi et Comment fut fondée la BIC*, op. cit., pp. 71-75.
- (60) Note sur la Société Maritime et Commerciale du Pacifique du 18 décembre 1918, MAE(SE, AO), Chine, vol. 126, folio 102 ; Audience du Tribunal Correctionnel de la Seine sur l'Affaire de la BIC du 31 mai 1923, op. cit., p. 10 ; Rapport d'André Poisson sur la BIC du 22 juillet 1921, op. cit., folio 124 ; Rapport de Guibal, député, à la Chambre des Députés, du 26 juin 1922 (N° 4562), Rapport de Cruchon, expert-comptable au Tribunal civil de la Seine, aux Présidents et membres du Comité de direction de la Société du Pacifique, du 10 février 1921, AEF, B31603 (BIC, Correspondance, N° 399bis) ; Patrice Morlat, *Le Krach de la Banque Industrielle de Chine*, Paris (Les Indes Saventes), 2012, pp. 40-41 ; Marie-Claire Bergère, *Les problèmes du développement et le rôle de la bourgeoisie chinoise : la crise économique de 1920-1923*, thèse pour le doctorat d'Etat (Paris VII), 1975, pp. 398-399.
- (61) Note sur la Société Maritime et Commerciale du Pacifique du 18 décembre 1918, MAE(SE, AO), Chine, vol. 126, folio 102.
 ちなみに、太平洋海運商業会社〔SMCP〕は、ブロッサール＝モパン社〔Brossard, Mopin et Cie〕が Hsin-Ho で建造した大型船の受取人（発注者）であった。Cf. 篠永宣孝「第一次大戦期の中国興業銀行の発展と変容—事業銀行か預金銀行か—」『東洋研究』第 189 号、2013 年 11 月、38-40 頁。
- (62) アルベール・ガリュセール〔Albert Gallusser〕については、篠永宣孝「第一次大戦期の中国興業銀行の発展と変容—事業銀行か預金銀行か—」『東洋研究』第 189 号、2013 年 11 月、19-68 頁、特に 57 頁注(4)、参照。
- (63) ポール・ブリュイセン〔Paul Bluysen〕(1861-1928) : 仏領インド選出代議士〔député〕(1910～1924 年)。彼の家系はボンディシェリーのもっとも古い家系と姻戚関係にある。コンドルセ〔Condorcet〕やロラン〔Rollin〕高校での学業を終わって、彼は 1880 年に印刷所を立ち上げ、『セース・エ・オワーズの蜜蜂〔*l'Abeille de Seine-et-Oise*〕』を刊行し、1885 年に『フランス共和国〔*République française*〕』紙に入社した——後に編集主幹になる——。1893 年から 1901 年まで、彼は編集長秘書として『ジュルナル・デ・デバ〔*Journal des Débats*〕』紙に移り、1901 年に『自由共和国通信〔*Correspondance républicaine libérale*〕』紙の主筆・社主となった。二度の下院選挙に落選したのち、1910 年に仏領インド選出の代議士に選ばれ、急進・急進社会主義グループに所属した。第一次大戦後、彼はフランス本国と植民地間の海上連絡ルートの再建に努めると同時に、1921 年以降『アクチュアリテ〔*Actualités*〕』紙や『植民地改革〔*Réforme Coloniale*〕』紙を率いて、ジャーナリズム界で活発な活動を展開した。1924 年 3 月には、辞職した友人のアンリ・ゲブレの後を引き継いで上院議員となった。Cf. *Dictionnaire des Parlementaires français (1889-1940)*.
- (64) アンリ・ゲブレ〔Henri Gaebelé〕(1860-1936) : 仏領インド選出上院議員〔sénateur〕(1922-1924)。1899 年 8 月に、彼は二人の兄弟と共に、ボンディシェリーに資本金 48 万フランの紡績・織物会社を設立した。ゲブレ三兄弟は、同社の総株数 960 株（額面 500 フラン）のうち、620 株（65%）を保有していた。アンリは、ボンディシェリー市長ののち、仏領インド県議会、ボンディシェリー商業会議所、農業会議所などの議長を務めた。1922 年 12 月に、死去したエチエンヌ・フランダン〔Etienne Flandin〕の後を受け、仏領インド上院議員に当選し、1924 年まで務めた。Cf. Rapport de Billecocq, commissaire du Gouvernement auprès de la BI, au ministre des Colonies, du 11 octobre 1899, AN(SOM), AE(SG), Carton 786 ; *Dictionnaire des Parlementaires français (1889-1940)*.
- (65) SMCP の 1921 年 10 月 31 日の貸借対照表〔Bilan〕に登場する 1 億 3000 万フランの BIC の当座貸越額〔créance〕は、SMCP の全負債〔passif total〕(2 億 1300 万フラン) の実に 61% も占めていたのである。Cf. Rapport de Cruchon, expert-comptable au Tribunal civil de la Seine, aux Présidents et membres du Comité de direction de la Société du Pacifique, du 10 février 1921, AEF, B31603 (BIC, Correspondance, No 399bis) ; Rapport d'André Poisson sur la BIC du 22 juillet 1921, op. cit.
- (66) Audience du Tribunal Correctionnel de la Seine sur l'Affaire de la BIC du 31 mai 1923, op. cit., p. 10.

- (67) Rapport d'André Poisson sur la BIC du 22 juillet 1921, op. cit., folio 124.
- (68) 【新経済金融 [Les Nouvelles Economiques et Financières]】紙によると、ジャソン [Jasson] は、とりわけ「いくつかの事業計画においてティヨン・ド・ラ・ショーム [Thion de la Chaume] の貴重な補佐として」、インドシナ銀行と緊密な関係があった。彼がSMCPの支配人であった僅かな期間に、彼は、「砂糖の投機によって、彼の共同出資者の一人におよそ80万フランも儲けさせる方法を見出した」ようである。Cf. "Les Nouvelles Economiques et Financières" du 27 juin 1922, AN, 65AQ, A366² (BIC).
- (69) Rapport de Guibal, député, à la Chambre des Députés, du 26 juin 1922 (N° 4562), AEF, B31603 (BIC, Correspondance, N° 399bis); "Les Nouvelles Economiques et Financières" du 27 juin 1922 et du 7 mai 1922, AN, 65AQ, A366² (BIC).
- (70) Audience du Tribunal Correctionnel de la Seine sur l'Affaire de la BIC du 31 mai 1923, op. cit., p. 11; Projet détaillé de réorganisation de la BIC du 27 septembre 1921, rédigé par la BPPB, MAE(SE, AO), Chine, vol. 98, folio 162-260 (notamment 257-258); Rapport d'André Poisson sur la BIC du 22 juillet 1921, op. cit., folio 124.
- (71) Audience du Tribunal Correctionnel de la Seine sur l'Affaire de la BIC du 31 mai 1923, op. cit., p. 11.
- (72) Rapport d'André Poisson sur la BIC du 22 juillet 1921, op. cit., folio 124.
- (73) [Note sur la] Société Maritime & Commerciale de France du 1^{er} Février 1921, AHCA (CL-Agricole), FBI, 439AH941. SMCF 所有の商船団 [flotte] は6676万4000フラン（トン当たり1,075フラン）と記載されているが、最も古い船舶は12年前のものであるので、現在（1921年2月1日）の価格は、せいぜいトン当たり550フラン（10ポンド）、つまり3410万フランに過ぎない。ちなみに、SMCFの商船団（17隻）のうち、ビュロー・ベリタス [Bureau Veritas]（船級協会）に登録されているのは4隻のみである。
- (74) Rapport d'André Poisson sur la BIC du 22 juillet 1921, op. cit., folio 84 et 124; "Les Nouvelles Economiques de Paris" du 7 août 1921, AN, 65AQ, O531 (Société Financière des Caoutchoucs); Projet détaillé de réorganisation de la BIC du 27 septembre 1921, rédigé par la BPPB, op. cit., folio 256. 北部蒸気汽船会社 [Northern Steamship Company] の株取得に由来するSMCF 所有の商船団（5万トン）は、当初6000万フラン（トン当たり1,200フラン）と見積もられていたが、経済恐慌の影響で、1921年にはトン当たり200フラン（1000万フラン）でも買手を見つけるのが難しかった。
- (75) 1923年11月5日において、SMCFへの三大債権者は、1880万フランのフランス銀行 [BF]、1150万フランのBIC、1060万フランのクロード・ラフォンテーヌ＝プレヴォ銀行 [Banque Claude Lafontaine, Prévost & Cie] ——SMCF負債総額4800万フランのうち三銀行合計で4100万フランを占めていた——。Cf. PV de la Banque de France du 10 janvier 1924, Délibérations du Conseil Général de la BF, N° 111, pp. 327-329.
- (76) Dépêche d'A. Boppe, ministre à Pékin, à S. Pichon du 30 septembre 1919 et Note sur la Campagne de Navigation Franco-Chinoise, MAE(SE, AO), Chine, vol. 126, folio 91 et 103; Rapport d'André Poisson sur la BIC du 22 juillet 1921, op. cit., folio 88.
- (77) Rapport d'André Poisson sur la BIC du 22 juillet 1921, op. cit., folio 104.
- (78) 篠永直孝「第一次大戦期の中国興業銀行の発展と変容—事業銀行か預金銀行か—」【東洋研究】第189号、2013年11月、41-44頁。
- (79) Audience du Tribunal Correctionnel de la Seine sur l'Affaire de la BIC du 31 mai 1923, op. cit., p. 12.
- (80) Projet détaillé de réorganisation de la BIC du 27 septembre 1921, rédigé par la BPPB, MAE(SE, AO), Chine; vol. 98, folio 203, 213 et 241-244; Audience du Tribunal Correctionnel de la Seine sur l'Affaire de la BIC du 31 mai 1923, op. cit., p. 12; "L'Activité Française et Etrangère" de mars 1922, AN, 65AQ, A366² (BIC).

SPICEFの不安定な状況にも拘らず、1919年12月に磷酸肥料化学製品フランス連合 [UFFEPCP]

- の株式発行に応募できるようにするために、BICはSPICEFに100万の新規融資を行った。SPICEFとそのグループの事業において、BICはその支配者〔*maitre*〕となった。BICは、SPICEFにA. ベルトロ、P. ショータル、J. ペルノットらで構成される経営委員会〔*Comité de gestion*〕を設置して、同社の軍需工場の再転換を指揮していたからである。
- (81) 篠永宣孝「第一次大戦期の中国興業銀行の発展と変容—事業銀行か預金銀行か—」【東洋研究】第189号、2013年11月、42-44頁。
- (82) *Projet détaillé de réorganisation de la BIC du 27 septembre 1921*, rédigé par la BPPB, MAE(SE, AO), Chine, vol. 98, folio 254-245 ; *Audience du Tribunal Correctionnel de la Seine sur l'Affaire de la BIC du 31 mai 1923*, op. cit., p. 12 ; *Rapport d'André Poisson sur la BIC du 22 juillet 1921*, op. cit., folio 104 et 126.
- (83) *Note sur l'Union Française de Fabriques d'Engrais, de Produits chimiques et de Phosphates*, s. d., AN, 65AQ, P979 (UFFEPCP).
- (84) *Projet détaillé de réorganisation de la BIC du 27 septembre 1921*, rédigé par la BPPB, MAE(SE, AO), Chine, vol. 98, folio 250-252.
- (85) *Note sur l'Union Française de Fabriques d'Engrais, de Produits chimiques et de Phosphates*, s. d., AN, 65AQ, P979 (UFFEPCP).
- (86) *Projet détaillé de réorganisation de la BIC du 27 septembre 1921*, rédigé par la BPPB, MAE(SE, AO), Chine, vol. 98, folio 250-252.
- (87) *PV de la Banque de France du 10 janvier 1924*, *Délibérations du Conseil Général de la BF*, N° 109, pp. 155-159 ; Augustin Hamon, *Maitre de la France, tome III*, Paris, pp. 214-216 et 224-225.
- (88) *Projet détaillé de réorganisation de la BIC du 27 septembre 1921*, rédigé par la BPPB, MAE(SE, AO), Chine, vol. 98, folio 245-249 ; *Statuts de la Société Alsacienne de Produits Chimiques* (déposé le 10 février 1920) et *Note sur la Société Alsacienne de Produits Chimiques*, s. d. [mais dans les années 1930], AN, 65AQ, P982 (SAPC) ; “*Commentaire*” de mai 1923, AEF, B31595 (BIC, Presse) ; *Archives historiques de BNP Paribas, Fonds CNEP, 73AH/297 (BIC)*.
- (89) タン・ミュルーズ化学製品会社〔*Société des Fabriques de Produits Chimiques de Thann et de Mulhouse*〕(anciens Etablissements Ch. Kester) —アニリン〔*aniline*〕、クレオソート〔*créosote*〕、香水〔*parfums*〕の製造に特化していた—の財政状態も、第一次大戦勃発以来、良好というわけではなかった。同社は、1900年以來5%の配当金を分配してきたが、1911年から戦争前まで4%に減額し、戦時中は38万6000フランの損失を蒙らねばならなかった。休戦後、同社もタン〔*Thann*〕とミュルーズ〔*Mulhouse*〕の二工場の再転換〔*reconversion*〕の問題に直面した。そこで、ミュルーズの工場とラパリスの工場を合同して新会社(SAPC)を設立することになったのである。Cf. “*Causeries d'un boursier*” du 5 février 1921, AN, 65AQ, A366² (BIC) ; *Projet détaillé de réorganisation de la BIC du 27 septembre 1921*, rédigé par la BPPB, MAE(SE, AO), Chine, vol. 98, folio 245-249 ; *Archives historiques de BNP Paribas, Fonds CNEP, 73AH/297 (BIC)*.
- (90) *Projet détaillé de réorganisation de la BIC du 27 septembre 1921*, rédigé par la BPPB, MAE(SE, AO), Chine, vol. 98, folio 245-249.
- (91) *Situation de l'Agence de Paris [de la BIC] au 31 décembre 1920* (Risques de portefeuille par Cédant), AHCA (CL-Agricole), FBI, 439AH938.
- (92) A.-J. Pernotte, *Pourquoi et Comment fut fondée la BIC*, op. cit., pp. 74-75.
- (93) *Projet détaillé de réorganisation de la BIC du 27 septembre 1921*, rédigé par la BPPB, MAE(SE, AO), Chine, vol. 98, folio 253 ; *Audience du Tribunal Correctionnel de la Seine sur l'Affaire de la BIC du 31 mai 1923*, op. cit., p. 12.
- (94) “*La Revue Economique et Financière*” du 20 novembre 1909, AN, 65AQ, O531 (SFC).
- (95) “*Information*” du 13 novembre 1909, “*La Revue Economique et Financière*” du 20 novembre 1909, AG de la Société Financière des Caoutchoucs du 14 juin 1911, AN, 65AQ, O531 (SFC).

- (96) Statuts de la Société Financière des Caoutchoucs du 8 juillet 1909, "*Économie Européenne*" du 3 octobre 1909, AN, 65AQ, O531 (SFC) ; Jean Lambert-Dansette, *Histoire de l'entreprise et des chefs d'entreprise en France, tome V*, Paris (L'Harmattan), 2009, p. 506.
- SFC の 310 万フラン (31,000 株) の初期資本金の応募者は次のとおりであった。Banque de l'Union Parisienne (5,000 株)、Union Financière de Genève (3,000 株)、Bunge et C^o, Banque de Reports de Fonds Publics et de Dépôts, Edouard Bunge, Deposito & Administratie Bank (以上、各 2,000 株)、Gouvernement du Congo Belge, Josse Allard, Bankverein Suisse, Ernesto Bunge, Jules Bunge, Cassel et C^o, Comptoir Industriel et Colonial, R. de Sanna, H. E. Feilding, Alfred Grisar, Emile Grisar, Moritz Hasenclever, comte Emile le Grelle, Nederlandsche Handel-Maatscappij, Vonder Heydt-Kersten & Söhne (以上、各 1,000 株)。
- (97) エドゥアール・バンジュ [Edouard Bunge] (1851-1927) : シャール・ギュスタヴ・バンジュ [Charles Gustave Bunge] (1811-1884) 息子。アンヴェルスのゴム・羊毛・綿の大輸入業者でベルギー植民地事業の大立者。彼は、ベルギー国立銀行 [Banque Nationale de Belgique] 監査役のほか、多数の企業・銀行の社長——Banque de l'Union anversoise (filiale de la Société Générale de Belgique), Federated Malay States Rubber Cy, l'Isanghi, Plantations de Talok-Dalam, Compagnie commerciale sud-américaine, Belgo-Argentine de Navigation, Minoteries et Elévateurs à Grains——や取締役——Banque Belge pour l'Etranger, Banque Brésilienne Italo-belge, Banque du Congo Belge, la Belge de Crédit Maritime, la Commerciale et Financière africaine, Bungsar Estates, Compagnie du Congo Belge, Comptoir Commercial Congolais, Hypothécaire Belge-américaine, Comptoir de Commerce et d'Industrie, Hypothécaire du Canada, Kuala Lumpur Rubber, Kuang Rubber Plantations, Lloyd Belge, Piasse Oeloe Rabber, Soeka Djali Estates, South American Cattle-Farmes, etc.——を兼務していた。 Cf. "*Pour et Contre*" du 23 mars 1919, AN, 65AQ, O531 (SFC) ; *Dictionnaire des Patrons en Belgique*, Bruxelles, 1996, pp. 80-81.
- (98) "*Information*" du 8 novembre 1909, "*Paris Capital*" du 18 novembre 1909, AN, 65AQ, O531 (SFC).
- (99) AG de la Société Financière des Caoutchoucs du 14 juin 1911, du 12 juin 1912, du 11 juin 13 et du 10 juin 1914, AN, 65AQ, O531 (SFC).
- (100) SFC の株式相場は、1909 ~ 1910 年に上昇したのち、徐々に下落しはじめ、1913 年の 91 フラン、第一次大戦初頭の 58 フランにまで暴落した。1915 年末においても依然額面の 100 フランを切っていた。ベルトロ = リヴォー・グループによる売買取引は、株価を 1918 年の 170 フランから 1919 年の 395 フラン、1920 年初頭の 435 フランにまで押し上げた。 Cf. "*Information*" du 14 mars 1919 et "*l'Argent*" du 18 février 1921, AN, 65AQ, O531 (SFC).
- (101) "*Agence Economique et Financière*" du 15 mars 1919, AN, 65AQ, O531 (SFC).
- (102) オリヴィエ・ド・リヴォー伯 [le comte Olivier de Rivaud] (1876-1938) : ジャンバチスト [Jean-Baptiste] (1804-1869) ——ヴィエンヌ県知事・県会議員——の息子。彼は、1908 年にリヴォー = キンクラン商会銀行 [Banque Rivaud, Kinkelin & C^{ie}], 1911 年にリヴォー兄弟商会 [Rivaud Frères & C^{ie}], そしてリヴォー銀行 [Banque Rivaud et C^{ie}] (植民地事業に特化した重要銀行) の創設者である。パリ証券取引所の場外市場に精通した彼は、証券銀行家組合 [syndicat des banquiers en valeurs] の組合長をしていた。彼の近親者として、兄弟のモーリス (1874-1929)、マックス (1877-1946)、ルネ (1887-1971)、そして彼の娘ポール [Paule] と結婚したジャン・ド・ボーモン伯 [le comte Jean de Beaumont] (1904-2002) がいる。リヴォー家は、植民地の、とりわけインドシナの強力な金融グループになる。実際、1936 年には、有力候補アルベル・サロー [Albert Sarraut] の息子オメール [Omer] を破って若いジャン・ド・ボーモン伯を代議士に当選させることになる。 Cf. *Dictionnaire Historique des Patrons Français*, Flammarion, 2010, pp. 602-605 ; Henri Coston, *Dictionnaire des Dynasties bourgeoises et du Monde des Affaires*, Paris, 1975, pp. 47-48 et 464-465 ; A. Hamon, *Les Maîtres de la France, tome III*, op. cit., pp. 187-189 et 287-288.
- (103) "*Petite cote de la Bourse*" du 15 mars 1919 et "*Cote Bourse et Banque*" du 19 mars 1919, AN,

65AQ, O531 (SFC).

SFCによって管理運営されていた別の企業——Compagnie des Caoutchoucs de Padang, Kuang Rubber Plantations——でも同様の出来事が起こった。すなわち、Ed. バンジュが社長を務めていたクアン・ゴムプランテーション [Kuang Rubber Plantations] においても、同時期にリヴォー家が主導する新取締役会——le comte Jean de Beaumont, O. de Rivaud, René de Rivaud, Raymond de Rivaud, Georges Ballu, A. Meilhan et Marcel Sauvagnac で構成——に取って代わられた。

Cf. "Agence Economique et Financière" du 16 juin 1919 et "La Petite Cote" du 28 mars 1919, AN, 65AQ, O531 (SFC).

(104) アドリアン・アレ [Adrien Hallet] (1867-1925) : ナミュールの名士の家系出身。農学技師・プランテーション経営者・金融家。1889年以後コンゴで活動。1899年にベルギーに帰り、ベルギー植民地銀行 [Banque coloniale de Belgique] の設立に参画した。1905年からは活動の舞台を極東・アジアに移して、アジアにおける油ヤシ (palmier à huile) 栽培のパイオニアとなった。その代表的事例は、彼が代表取締役を務めたスマトラ製油会社 [Compagnie des Huilerie de Sumatra] の創設であった。インドシナでは、1910年にテール・ルージュ・プランテーション [Plantations des Terres rouges] やカンボジア会社 [Compagnie du Cambodge] などを創設した。同時に、彼はその他多数の銀行・企業の社長——Plantations Fauconnier et Posth, Palmeraies de Mopoli, Banque des Colonies (fondée en 1919 par A. Hallet)——、代表取締役——Crédit Colonial, Compagnie du Selangor, Compagnie de l'Hévéa (fondée en 1908 par A. Hallet)——、取締役——Deli Moeda-Plantagen, Plantations Annamites, Plantations Hallet, Société des Caoutchoucs de l'Indochine (fondée par Octave Homberg)——などを兼務していた。彼は、ブリュッセルに個人銀行、アレ銀行 [Banque Hallet] を設立していた。 Cf. AG de la Société Financière des Caoutchoucs du 11 juin 1919, dans "La Vie Financière" du 17 juin 1919 et "Pour et Contre" du 23 mars 1919, AN, 65AQ, O531 (SFC) ; *Annales des Planteurs de Caoutchoucs de l'Indochine* (Congrès d'agriculture colonial), Paris, 1918, pp. 176-177 et 180-182, AN, F¹² 8034 ; O. Homberg, *Les Coulisses de l'Histoire : Souvenirs 1898-1928*, Paris, 1938, pp. 236-238 ; *Dictionnaire des Patrons en Belgique*, Bruxelles, 1996, pp. 342-344 ; *Dictionnaire Historique des Patrons Français*, Flammarion, 2010, p. 603.

(105) "Revue Parisienne de Banque et de Mines" du 30 mars 1919 et AG de la Société Financière des Caoutchoucs du 11 juin 1919, dans "La Vie Financière" du 17 juin 1919, AN, 65AQ, O531 (SFC).

(106) "La Vie Financière" du 31 mai 1919 et "Pour et Contre" du 22 juin 1919, AN, 65AQ, O531 (SFC).

(107) AG de la Société Financière des Caoutchoucs du 11 juin 1919, dans "La Vie Financière" du 17 juin 1919 et "Pour et Contre" du 22 juin 1919, AN, 65AQ, O531 (SFC).

また、SFCはA. アレによって1908年に資本金40万フランで設立されたパラゴム会社 [Compagnie de l'Hévéa] (インドにおけるプランテーション株のトラスト) との協力関係も続行した。すなわち、SACはパラゴム会社やサイゴンの企業家グループとともに、インドシナ政府から認可された払下げ地「ラ・ラーニャ [La Lagna]」——サイゴン・ファンチュエット [Phanthiet] 鉄道の北20Kmに位置する2万5000ヘクタールの土地で、サトウキビの生産用地とされた——を開発する目的の会社 [Compagnie de La Lagna] を設立した。Cf. AG extraordinaire de la SFC du 23 septembre 1919, dans "La Vie Financière" du 25 septembre 1919 et "Bulletin de Paris" du 28 septembre 1919, AN, 65AQ, O531 (SFC).

(108) AG extraordinaire de la SFC du 23 septembre 1919, dans "La Vie Financière" du 25 septembre 1919 et "Les Nouvelles Economiques et Financières" du 7 août 1921, AN, 65AQ, O531 (SFC).

(109) 植民地銀行 [Banque des Colonies] (資本金1000万フラン) は、A. アレによって——Prosper Wielemans, Jules Delannoy, Olivier de Rivaud, A. Lagrangeなどの協力を得て——1919年にブリュッセルに創設された。同銀行は、経営陣にA. アレ、O. ド・リヴォー、J. ペルノットを擁していることから、SFCと経営陣や利害を共有していた。1920年にSFCは植民地銀行の株式2,000株(全体の10%)を取得した。他方、1920年のBICの増資の際に2,500株を引受けた植民地銀行は、1920

- 年末に BIC に対して 1,366,925 フランの債務を負っていた——尤も、この債務は 1921 年に全て清算されている——（表 6、表 12 参照）。 Cf. “*Les Nouvelles Economiques et Financières*” du 17 février 1923, AN, 65AQ, O531 (SFC) ; Rapport d'André Poisson sur la BIC du 22 juillet 1921, op. cit., folio 69 et 142 ; “*Les Nouvelles Economiques et Financières*” du 7 octobre 1922, AN, 65AQ, A366² (BIC) ; *Dictionnaire des Patrons en Belgique*, Bruxelles, 1996, p. 343.
- (110) この結果、発起人株 1 万株を得た植民地銀行は株主総会で 30 万票の投票権を有したのに対し、他のすべての株主（49 万株）は 49 万票を有することになった。その上、同銀行は現金 200 万フラン——後の 1921 年 2 月 15 日に支払い可能——の受取りと、額面 100 フランの新株 9 万株のうち 1 万株を額面価格で引受ける権利を得たのである。 Cf. AG extraordinaire de la SFC du 3 décembre 1920, dans “*Cote Libre*” du 5 décembre 1920 et “*La Vie Financière*” du 6 décembre 1920, “*Cote du jour*” du 27 octobre 1920, “*l'Argent*” du 18 février 1921, AN, 65AQ, O531 (SFC).
- (111) “*Agence T. Universelle*” du 22 décembre 1920, AN, 65AQ, O531 (SFC).
- (112) “*Cote du jour*” du 27 octobre 1920 ; AG extraordinaire de la SFC du 3 décembre 1920, dans “*Cote Libre*” du 5 décembre 1920 et “*La Vie Financière*” du 6 décembre 1920 ; “*Les Nouvelles Economiques et Financières*” du 7 août 1921 ; AG de la SFC du 22 juin 1921, dans “*La Vie Financière*” du 25 juin 1921 et “*Le Portefeuille*” du 5 octobre 1922, AN, 65AQ, O531 (SFC).
- (113) A.-J. Pernotte, *Pourquoi et Comment fut fondée la BIC*, op. cit., p.74.
- (114) La Presse dans le carton; AN, 65AQ, O531 (SFC) ; A. Hamon, *Les Maîtres de la France, tome III*, op. cit., pp. 187-189.
- (115) “*Les Nouvelles Economiques et Financières*” du 17-27 juillet 1922, AN, 65AQ, A366² (BIC) ; “*Les Nouvelles Economiques et Financières*” du 17 février 1923, AN, 65AQ, O531 (SFC) ; PV des Réunions du Consortium, tenues les 11 et 26 août et le 29 décembre 1921, à la BPPB, AEF, B31602 (BIC, Correspondance, No 142, 149 et 244).
- (116) 篠永宣孝「第一次大戦期の中国興業銀行の発展と変容—事業銀行か預金銀行か—」【東洋研究】第 189 号、2013 年 11 月、45-46 頁。
 パリバもベルギー支店を介して同事業の中心人物ステファン・ルー＝ボードラン（Stéphane Roux-Baudrand）に 300 万フランの前貸〔avance〕を供与している。 Cf. Archives historiques de BNP Paribas, PTC/ 638 (PV du Conseil d'Administration de Paribas).
- (117) Rapport d'André Poisson sur la BIC du 22 juillet 1921, op. cit., folio 83 et 125 ; Situation de l'Agence de Paris [de la BIC] au 31 décembre 1920 (Risques de Portefeuille par Cédant), AHCA (CL-Agricole), FBI, 439AH938.
- (118) 篠永宣孝「第一次大戦期の中国興業銀行の発展と変容—事業銀行か預金銀行か—」【東洋研究】第 189 号、2013 年 11 月、47-48 頁。
- (119) Situation de l'Agence de Paris [de la BIC] au 31 décembre 1920 (Risques de Portefeuille par Cédant), AHCA (CL-Agricole), FBI, 439AH938 ; Audience du Tribunal Correctionnel de la Seine sur l'Affaire de la BIC du 31 mai 1923, op. cit., p. 15.
 ちなみに、同社〔ラ・クルヌーヴ鑄造・機械製作会社〕の取締役のシャルル・グジヨン〔Charles Goujon〕はシャルル・グジヨン商会〔Etablissements de Charles Goujon〕の社長でもあったが、彼の商会も 1921 年 4 月 16 日に会社更生の手続きを申請したのである。
- (120) A. ド・サン＝ファールは、後のアレクサンドル・ド・サン＝ファール銀行〔Banque Alexandre Saint-Phalle et C^{ie}〕——1941 年にファンネル＝ビーン〔Fanner et Beane〕銀行を継承して設立された——の創立者、あるいはその家系と思われる。 Cf. Henri Coston, *Dictionnaire des Dynasties bourgeoises et du Monde des Affaires*, op. cit., pp. 491-493.
- (121) Rapport d'André Poisson sur la BIC du 22 juillet 1921, op. cit., folio 126.
- (122) Rapport d'André Poisson sur la BIC du 22 juillet 1921, op. cit., folio 104 ; PV des Réunions du Consortium, tenue le 26 août 1921, à la BPPB, AEF, B31601 (BIC, Correspondance, N° 149).

- (123) Situation de l'Agence de Paris [de la BIC] au 31 décembre 1920 (Risques de Portefeuille par Cédant), AHCA (CL-Agricole), FBI, 439AH938.
- (124) 前記の注(19)参照。篠永宣孝【フランス帝国主義と中国】、422-423頁。
- (125) “Commentaires” de mai 1923, AEF, B31595 (BIC, Presse).
- (126) Rapport d'André Poisson sur la BIC du 22 juillet 1921, op. cit., folio 125.
- (127) AG ordinaire et extraordinaire de la Banque Centrale Française du 28 février 1907, Statuts de la BCF de 1905, “Petites Affiches” du 25 décembre 1905, “Globe” du 24 janvier 1907 et “Guide du Capitaliste” du 25 mai 1910, AN, 65AQ, A97 (BCF).
- (128) AG de la BFC du 28 février 1907, AN, 65AQ, A97 (BCF).
- (129) AG de la BFC du 10 avril 1908 et “Guide du Capitaliste” des 15 et 25 avril 1908, AN, 65AQ, A97 (BCF).
- (130) AG de la BFC du 24 avril 1909, “Information” du 24 avril 1909 et “Guide du Capitaliste” du 25 avril 1909, AN, 65AQ, A97 (BCF).
- (131) AG de la BFC du 11 mai 1910, dans “La Vie Financière” du 12 mai 1910 et “Guide du Capitaliste” du 15 mai 1910, AN, 65AQ, A97 (BCF).
- (132) フランスの第一級の自動車工業会社に格付けされるシュナール=ヴァルカー社〔Chenard et Walcker〕は、1911年12月に、BCFの後援のもとに自動車商会〔Comptoir Automobile〕を吸収合併した。Cf. AG de la BFC du 16 mai 1911, dans “La Vie Financière” du 17 mai 1911, AG de la BCF du 24 mai 1912, AN, 65AQ, A97 (BCF)；原輝史編【フランス経営史】有斐閣、1980年、79頁。
- (133) AG de la BFC du 24 mai 1912, AN, 65AQ, A97 (BCF).
- (134) AG de la BFC du 18 juin 1913, ibidem.
- (135) AG de la BFC du 20 juin 1914, dans “La Vie Financière” du 22 juin 1914, AN, 65AQ, A97 (BCF).
- (136) “Le Capital” du 28 juin 1914, “Information” du 1^{er} août 1914 et “La Vie Financière” du 1^{er} août 1914, AN, 65AQ, A97 (BCF).
- (137) Rapport d'André Poisson sur la BIC du 22 juillet 1921, op. cit., folio 125 ; AG de la BFC du 20 juin 1914, dans “La Vie Financière” du 22 juin 1914, AN, 65AQ, A97 (BCF).
- (138) [Note sur la] Banque Centrale Française, Archives Historiques de BNP Paribas, Fonds CNEP, 73AH/297 (BIC).
- (139) Rapport d'André Poisson sur la BIC du 22 juillet 1921, op. cit., folio 67 et 69 ; “Le Messager de Paris” du 27 octobre 1921, ABF (Chemise, affaire de la BIC).
- (140) “Petites Affiches” du 25 octobre 1919 et AG de la BFC du 12 juillet 1920, dans “La Vie Financière” du 15 juillet 1920, AN, 65AQ, A97 (BCF) ; Audience du Tribunal Correctionnel de la Seine sur l'Affaire de la BIC du 31 mai 1923, op. cit., p. 7 ; Projet détaillé de réorganisation de la BIC du 27 septembre 1921, op. cit., folio 212-217.
- (141) Rapport d'André Poisson sur la BIC du 22 juillet 1921, op. cit., folio 125 ; [Note sur la] Banque Centrale Française, Archives Historiques de BNP Paribas, Fonds CNEP, 73AH/297 (BIC).
- (142) 古くからの急進派の機関紙であった【ラ・ランテルン〔La Lanterne〕】紙は、他の多くの新聞と同じような有為転変を経験した。1893年、A. プリアンはウジェーヌ・メイエル〔Eugène Mayer〕主宰の【ラ・ランテルン】紙に記者として入社し、翌1894年に編集長補佐〔secrétaire de rédaction〕となった。同紙が1896年に倒産したときに、A. プリアンはアグレジェのサバチエ〔Sabattier〕やユダヤ系ポルトガル人の著名な金融資本家一族のウジェーヌ・ペレール〔Eugène Péreire〕の支援を得て同紙を再建し、その主筆〔rédacteur en chef〕、次いで主幹〔directeur〕となった。ドレフュス事件でプリアンとペレールの間に齟齬が生じたので、1898年にプリアンは主幹をA. ミルラン〔A. Millerand〕に譲った。A. ミルランは【ラ・ランテルン】紙主幹を1899年まで務めた後、同紙はR. ヴィヴィアーニ〔R. Viviani〕に受け継がれた。その後、1904年に社会主義者グループ全員は【ユマニテ〔L'Humanité〕】紙に移った。A. ベルトロによると、R. ヴィヴィアーニ

- は『ラ・ランテルン』紙を一時掌握していたが、1918年中に同紙の株式を転売した。
 Cf. Georges Suarez, *Briand, tome I (1862-1904)*, Paris, 1938, pp. 151-240 ; G. Kurgan-van Hentenryk, "De Clio à la Finance : les Origines de la fortune d'André Berthelot" *RBPH, LV, 1977, 2, p. 478* ; C. Bellanger, J. Godechot, P. Guiral et F. Terrou, *Histoire générale de la Presse française, tome III*, Paris, 1972, p. 364.
- (143) 【ビュルトン・ド・パリ】紙の主幹・発行人〔directeur-gérant〕は、Ch. ビクトールの義理の兄弟、ガストン・プーラン〔Gaston Poulain〕であった。G. プーランは、フランス中央銀行〔BCF〕の会計監査役〔commissaire aux comptes〕(1910-12年)、取締役(1912-13年)、代表取締役(1912-13年)を務めると同時に、フランス西アフリカ会社の監査役〔commissaire-censeur〕も兼任していた。 Cf. AN, 65AQ, A97 (BCF) ; Circulaire de Simon Bernheim de juillet 1921, AEF, B31601 (BIC, Correspondance, N° 94).
- (144) Audience du Tribunal Correctionnel de la Seine sur l'Affaire de la BIC du 31 mai 1923, op. cit., pp. 7 et 9 ; Rapport d'André Poisson sur la BIC du 22 juillet 1921, op. cit., folio 85 ; Projet détaillé de réorganisation de la BIC du 27 septembre 1921, op. cit., folio 205 ; J. N. Jeanneney, *L'Argent caché*, Paris, 1981, pp. 170-171.
- (145) カミーユ・エマール〔Camille Aymard〕(1881-1964) : パリの法曹界に弁護士(1903-07)として登場し、次いでインドシナで公証人(1907-19)となった。インドシナで同時に、彼は『ランパルシアル〔*l'Impartial*〕』紙を創刊し、ゴム・プランテーション会社 "Société Nouvelle des Plantations de Tan-Thanh-Dong" の取締役を務めた。フランスに帰国後、1920年に『フィガロ〔*Figaro*〕』紙の代表取締役役に就いた。次いで、彼は『ラ・リベルテ』紙を購入し、ジャック・ドリオ〔Jacques Doriot〕が掌握することになる1937年まで『ラ・リベルテ』紙を主宰した。 Cf. H. Coston, *Dictionnaire de la Politique Française, tome II*, Paris, 1972, p. 34 ; *Annales des Planteurs de Caoutchoucs de l'Indochine* (Congrès d'agriculture colonial), Paris, 1918, p. 131 ; J. N. Jeanneney, *L'Argent caché*, op.cit., p. 170.
- (146) Rapport d'André Poisson sur la BIC du 22 juillet 1921, op. cit., folio 85.
- (147) 篠永宣孝「第一次大戦期の中国興業銀行の発展と変容—事業銀行か預金銀行か—」『東洋研究』第189号、2013年11月、38-53頁 ; Rapport d'André Poisson sur la BIC du 22 juillet 1921, op. cit., folio 104 et 125-126.
- (148) Audience du Tribunal Correctionnel de la Seine sur l'Affaire de la BIC du 31 mai 1923, op. cit., p. 7.
- (149) Projet détaillé de réorganisation de la BIC du 27 septembre 1921, op. cit., folio 212-217 ; Rapport d'André Poisson sur la BIC du 22 juillet 1921, op. cit. folio 124-127 ; Portefeuille Titres et Participations Financières au 31 décembre 1920 (BIC), AHCA(CL-Agricole), FBI, 439AH950 (BIC, Siège Social).
- (150) フランス国民外国貿易銀行〔Banque Nationale Française du Commerce Extérieur〕は、フランスの外国貿易を支援する目的で、国庫補助を受けて、パリバ、フランス動産銀行〔CMF〕、フランス商工銀行〔BFCI〕などの協力によって、1919年10月に資本金1億フランの株式会社として設立された半公共的機関。同行副頭取の一人として、パリバ頭取のガストン・グリオレ〔Gaston Griolet〕が選任された。 Cf. AG de la BPPB du 30 mars 1920, AN, 65AQ, A8091 (BPPB) ; F. François-Marsal (dir.), *Encyclopédie de Banque et de Bourse, tome I*, Paris (Crété), 1928-31, pp. 507-510 ; Edmond Baldy, *Les Banques d'Affaires en France depuis 1900*, Paris, 1922, pp. 302, 308-311.
- (151) ライン銀行〔Banque du Rhin〕は、フランス国籍の株式会社として、1919年5月19日に主としてジュール・マルシャル〔Jules Marchal〕(サン＝ディエの企業家)やフランソワ・ルノー〔François Renauld〕(ナンシーのルノー銀行)などのフランス東部の企業家や銀行家のグループによってストラズブルに設立された。設立資本金は800万フランであったが、1919年5月31日に1000万フラン、そして同年10月20日に5000万フラン(額面500フランの株式10万株)に増額された。主要な株主は次のとおりである。パウエル＝マルシャル銀行〔Banque Bauer-Marchal et C^{ie}〕(14,485株、

全体の14.5%)、アンリ・バウエル [Henri Bauer]、シャルル・マルシャル [Charles Marchal]、ジュール・ルデルダン [Jules Lederdin] (タオンの企業家)、ジュール・マルシャル [Jules Marchal]、ジョルジュ・ヴォルメール [Georges Wormer]、ラザール・ヴェイエール [Lazare Weiller] (上院議員)、ルノー銀行 [Banque Renault]、フランソワ・ルノー [François Renault]、シャルル・ヴラン商会 [Société Charles Velin et C^{ie}] ——以上、各2,000株——、BIC (1,485株)、ジョルジュ・クレラン商会 [Société Georges Clairin et C^{ie}]、シューマン=プファイファー商会 [Banque Schufmann-Pfeiffer et C^{ie}] ——以上、各1,000株——。設立時のライン銀行取締役会の構成は次のようであった。

役員名	役職	その他の役職、職業
Maurice Burrus	Président	Industriel, Ad ^r de la S ^{te} des Bois Imprégnés
Louis Michel	Ad ^{eur}	Sénateur, Ad ^r de la Banque Renault, du CF
Paul Lederlin	d ^o	S ^{eur} , A-D de la Blanchisserie et Teinturerie de Thaon
Lazare Weiller	d ^o	Sénateur, Industriel à Sélestat, Ad ^r des sociétés
Alfred Breuvert	d ^o	Industriel à Lill, P ^t de la banque Georges Clairin et C ^{ie}
Emile Petit	d ^o	Ad ^r de la Banque Privée
Jules Lévy	d ^o	ancien banquier à Strasbourg
Alexandre Palliez	d ^o	ancien banquier, Ad ^r de Lille, Bonnières et Colombes
E. Rassin-Masurel	d ^o	Industriel à Roubaix
Henri Bauer	d ^o	associé de la Banque Bauer-Marchal et C ^{ie}
Charles Marchal	d ^o	associé de la Banque Bauer-Marchal et C ^{ie}
Jules Marchal	d ^o	Industriel à St-Dié
André Le Bourhis	D ^r Général	ancien Inspecteur de la Banque de France

[Source : [Rapport sur la Banque du Rhin] de 1922, [Note sur] la Banque du Rhin du 13 novembre 1922 et Note confidentielle sur la Banque du Rhin du 29 décembre 1922, AN, F⁷ 12951² (Notes Jean, microfilm).]

尚、ライン銀行は、1922年3月にフランス信用銀行 [Crédit Français] (元ドゥメール銀行 [Banque Doumer]) の全店舗・顧客を買収して、営業窓口を一挙にパリやフランス北部へ拡張した。だが、1928年にライン銀行は、アルザス・ロレーヌ銀行 [Banque d'Alsace et de Lorraine] (1871年設立) に吸収合併されることになる。‘Cf. [Rapport sur la Banque du Rhin] de 1922, [Note sur] la Banque du Rhin du 13 novembre 1922 et Note confidentielle sur la Banque du Rhin du 29 décembre 1922, AN, F⁷ 12951² (Notes Jean, microfilm) ; F. François-Marsal, *Encyclopédie de Banque et de Bourse*, Tome I, Paris, 1930, p. 490 ; Germain Martin, *Banques régionales et banques locales*, Paris, 1922, pp. 81-82.

(152) オランダ=アメリカ銀行 [Banque Hollando-Américaine] は、Ph. L. ヴァン・エメール商会銀行 [Banque Ph. L. Van Hemert et C^{ie}] ——1903年に資本金30万フランで設立された銀行で、主としてアメリカやエジプトの事業に従事していた。(外国株投資) ——を継承して、1907年に資本金500万フランで設立された。アムステルダムの “Maison Labouchère, Oyens et C^{ie}”、アンヴェルスの “Banque de Reports de Fonds publics et de Dépôts”、ブリュッセルの “Caisse des Propriétaires”、ニューヨークの “Société Blake frères et C^{ie}” が同行の設立に参加した。銀行取締役会は、Ph. L. Van Hemert (頭取)、Gaston Brierre, Edouard Thys, Léopold du Monceau, Louis Ewald, Jules Rolin. で構成されていた。Cf. AN, 65 AQ, A185 (Banque Hollando-Américaine) .

(153) ドン・トリウ石炭会社 [Société des Charbonnages de Dong Trieu] は、ホンゲイ炭鉱から60km、ハイフォンから57kmに位置するドン・トリウ炭田——1900年に探索され、1908年に契約

- 締結——を開発するために、1916年に設立された。ホンゲイ炭田よりも規模は小さいが、ドン・トリウ炭田は極めて高品質の無煙炭（97%のカーボン）を産する。 Cf. AN, 141AQ1-2 ; Christiane d'Ainval, *Les belles heures de l'Indochine française*, Perrin, 2001, pp. 205-208 ; Jacques Boudet (dir.), *Le Monde des Affaires en France de 1830 à nos jours*, Paris, 1952, p. 505.
- (154) Projet détaillé de réorganisation de la BIC du 27 septembre 1921, op. cit., folio 212-217.
- (155) Note pour Milliès-Lacroix, président de la Commission des Finances du Sénat, s. d. [1921], AN(SOM), AE(SG), Carton 826 (BIC, III).
- (156) AG ordinaire et extraordinaire de la BIC du 25 juillet 1921, AEF, B31601 (BIC, Correspondance, No. 146).
- (157) Ibidem. ヨーロッパと極東間の商品取引を表す手形〔papiers〕によって大部分構成されていたBICの保有手形〔Portefeuilles-effets〕の金額も同様に、1918年の6530万フランから、突然に1919年の2億3550万フラン——1年間で実に3.6倍以上——、1920年の2億3080万フランへと激増した。
- (158) Ibidem ; Rapport d'André Poisson sur la BIC du 22 juillet 1921, op. cit., folio 76.
- (159) 篠永宣孝「第一次大戦期の中国興業銀行の発展と変容—事業銀行か預金銀行か—」、『東洋研究』第189号、2013年11月、32-33, 36頁 ; Dépêche du Consul, Gérant le Consul Général de France à Changhai (Wilden), à A. Ribot, Président du Conseil et Ministre des Affaires Etrangères, du 7 avril 1917, MAE(SE, AO), Chine, vol. 101, folio 89. BICは、固定預金〔dépôt fixe〕に6～7%もの利子、要求払い預金〔compte à vue〕にも1%の利子を提供していた。
- (160) Audience du Tribunal Correctionnel de la Seine sur l'Affaire de la BIC du 31 mai 1923, op. cit., pp. 8 et 20 ; Rapport d'André Poisson sur la BIC du 22 juillet 1921, op. cit., folio 76-77 ; A.-J. Pernotte, *Pourquoi et Comment fut fondée la BIC*, op. cit., pp 53-79 (notamment 68-69).